

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十六年五月二十五日 印刷
昭和四十六年六月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五二九号



No. 529

六月号

高槻店	庄内店	淡路店	住道店	瓢箪山店	若江岩田店	駒川店	喜連店	我孫子店
-----	-----	-----	-----	------	-------	-----	-----	------



すしの日本

味に輝く北極星チェーン39店

北極星本店 / 大阪市南区難波新地 06(641)1275

百舌鳥店	上野芝店	鳳店	北助松店	岸和田店	平野店	松原店	枚方店	★
------	------	----	------	------	-----	-----	-----	---

路郎忌川柳大会の兼題締切迫る！

7月1日までに本社へご送句のほどを！

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！



大阪・東京
大丸
京都・神戸

明日のくらしの
コンサルタント



上本町店



アベノ店



アベノ・上本町
近鉄

アベノ店 621-1231・上本町店 779-1231

自作自演結局投げ出す破目になり

妻にだけ胸張つてみる凡夫婦

春の彩散る心など思うまじ

ふと動きやめてゼニ亀惟うこと

浜田久米雄氏句碑除幕を祝い

男ありて颯爽と春の陽に語る

前号訂正・足馴れた陸橋だから小糠雨

中島生々庵



右、生々庵主幹 左、浜田久米雄氏

化 消 不

句会などで初心者らしい人が、今日は一句しか抜けなかった、全没だったと苦が笑いしめるのをよく見受ける。一週間も十日も時とすると一カ月近くも課題吟にとり組んだ上で全没とか辛うじて一句とかでは苦笑も渋面も無理ない話かも知れぬ。ただすべきは自分の不作は言わず、選者の選句眼を云々する等は慎む事、抜ける事ばかり念頭に選者の好みに応ずる投句は自分を傷つける結果になるから警戒ものである。世の中の過保護の母親が赤ん坊の便を非常に気にして少しでも不消化

物が便の中に出て来ると大騒ぎする。抜ける句の少くないのを気にしすぎるのは、一寸これに似て居る感がある。半分位は不消化物を食べる事が腸の働きから言えば大変必要である。不消化物が腸の壁を刺激して内容を小腸から大腸から直腸に送るのである。20句投句して20句抜けるような完全消化は腸壁を鍛錬する所以ではないかも知れぬ。萎縮や自閉は禁物で、或る程度大胆に作句は発表すべきである。

川柳塔八月号目次

座右の句

凡聖一如元旦の心知る

(路郎)

私の句

父と子の和みて語らず朝のお茶

尼 緑之助

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

中島生々庵……………(1)

中島生々庵選……………(4)

工藤甲吉……………(2)

川柳とは?の会……………(九十五)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

「句の生命」について……………(上)

近作柳樽……………

北川春巢……………(24)

秀句鑑賞……………(同人吟)

川村好郎選……………(30)

近詠……………(近作柳樽)

西尾琴……………(26)

「旅人」以後の麻生路郎作品……………(9)

菊沢小松園……………(27)

詩人とヨーチン……………

諸家……………(45)

東野大八……………(28)

東野大八……………(28)

川柳とは?の会

工藤甲吉

昨年、亡くなられた東京の 大木笛我さん(元・川柳丹若会)から「あなたは川柳塔の同人でいらっしゃるから」と古い「川柳雑誌」六十数冊を贈られ、それをそのまま書斎の一隅に最近までしまいで置いて置いた。ところがこのほど整理にとりかかったところ、中には「川柳雑誌」の二百号(昭和十五年九月号)や、雑誌奉還と銘打った終刊号(二百三十九号・同十八年十二月号)がまじっていた。

当時。この雑誌は、私たちの「川柳みちのく吟社」にも送られ、一度お目にかかったたので懐しさもひとしお繰ってみた。二百号には特別それにちなんだ記事はのっていないが、表紙裏に一つこれを記念する。「川柳とは?の会」という社告がのっていた。内容は「川柳とは?」初代川柳柄井八右衛門に就て・川柳の形式・古句研究の仕方・作句のコツ・選の仕方・句会の方法・吟行に就て・川

川柳五十三次……(九)	富士野鞍馬……(42)
感激の句碑除幕式……	浜田久米雄……(40)
核もよいが……	高鷲亜鈍……(25)
雑筆……	西尾 栞・谷垣 史好・不二田一三夫 有信新之助・阪上十止庵・神谷 凡九郎……(41)
雅号ぶつちやけばなし……	小笠原青女……(49)
初歩教室……	本田恵二朗……(48)
大萬川柳「朝食」……	川村好郎選……(50)
川柳家の曆……(六月生まれの人) 遺稿……	清水白柳……(54)
柳界展覧……	(薰風)……(52)
本社五月句会……	(庸佑)……(57)
各地柳壇……	(文秋)……(60)
一路集「冷凍」……	木村涼人選……(46)
「純情」……	坂井三葉選……(46)
「ブレーキ」……	友淵貴山選……(47)
編集後記……	(二三夫・葉子)……(65)



柳写真に就て・川柳時事吟・戦線銃後の句・川柳持論・作家・作句・態度・題詠に就て・雑吟に就て・川柳と漫画の關係其の他。川柳とは？と云ったところで一言でよく云い尽す言葉を知らない。それほど川柳の道は遠くして深い。ここに我等同志は起つて大衆へ呼びかけることとした。来り会してこの壮挙に一臂の力を藉せ！

という「会」である。なんと、さかんなる師・麻生路郎の「川柳の社会化運動」かな、である。このような「会」が、このあと、いつ、どこで、誰の手により再現されることだろう。終刊号の、師の一文「苦闘四十年」を読んでもわかるが、師は川柳の社会化のため文字どおり血のにじむ苦闘をつづけられた。それは実に「偉大」というほかないようである。師は「雲の峰」に在って、今も尚きつとこれを叫んでるにちがいない。

川柳の社会化はいぜん重要である。したがってこの運動はいろいろなかたちでいっそう推進されなければならない。運動らしい運動をしていない私どもの「地方」など、尚更である。来月の師の七回忌を前に、私をならむ頭上の額の「ふるくとも僕には仁義礼智信」の座右の名句がひとしお懐しい。



中島生々庵選

大阪市 天正千梢

齒車は個性の表現許さない
軽卒に夫も幸福と思ひ込み
途方もない野心酒と共にさめ
形式上の権威表札夫の名
役に立つ事ばかりされて窒息し

大阪市 西森花村

選挙終わる

咲くも春散ってゆくのも春と知る
ゆく春を花も金魚もしずかなり
春うらら今日の遅刻のツレが出来
言うなれば小骨の多い女にて
春爛漫四天のようにポリス立ち

岡山県 直原七面山

息子が継がぬ誇りある職
あなたの付録で終る一生
美しくとも花は散るもの
長崎は雨だったよと解く旅装
引越しの後に風鈴だけ残り

松江市 中川晃男

極秘作戦まず味方からだまし
豪華な墓に誰も参ってくれず
マイカーでちよいと煙草を買いに出る
姿見へ帯を叩いて斜に構え
三面鏡でも心は写されず

豊中市 戸田古方

春の旅(五句)

県境越えると顔だちまで変わり

お土産の残りは駅で買うときめ
過すほど飲んで呉れるも旅の妻

エコノミックアニマルこんな岬に造船所
花咲かばも早やのどかな旅でなし

倉敷市 本田恵二朗

黒眼鏡慇懃無礼に強請るなり

浜育ち波の機嫌を知りつくし

とんでもない儲かりまへんと嘘をつき

女上位それもよかると負け惜しみ

仲人役こんどは帯親たのまれる

高槻市 若柳潮花

ばんぼりへ日本の色で散る桜

サーピスのつもりで膝をつねられる

つれ舞の汗いたわり合うてお茶

金かけた化粧を流す楽屋風呂

春雷が花ふるわせて通り抜け

高槻市 福田丁路

スモッグが絵にする千里ニュータウン

骨折り損の美容体操

何が何んだと短気な辞表

風薫る若葉の里の手打ち蕎麦

月は朧にアベック根気よく座り

大阪市 本多柳志

信心のないそろばんで寺を継ぎ

実力ではいってコネにあなどられ

定年まで来てもハンディー縮まらず

手を振った程票数は集らず

一票の理路整然と棄権され

兵庫県 大江秋月

我が家新築(四句)

二十年生きる余生に建てた家

炊事場の設計だけは妻まかせ

借金の匂いが二階までもする

長男の意見は車の置きどころ

三時間美女の足見て旅終わる

高槻市 傍島静馬

風流にしてはひつこいなたね梅雨

何よりも阿呆になれと云う見舞い

膳本を取って金婚繰って見る

中味さえあれば水引など要らず

ニコチンが少ないなどとやめられず

大阪市 正本水客

足摺岬

雲はやく波の早さに語りかけ

岩礁と波と敵視の声を和す

岩礁は波をかんで飽くことがない

押し寄せる黒汐に燈台ひとつ胸を張る
沖ゆく船の動きが時間を止めている

大阪市 木村水洞

宇宙開発よりも身近かな事があり

裏長屋の植木鉢にも陽の恵み

仏だんに親しくなつて欲が減り

吉野

妻連れて何年ぶりの桜かな

道行にしてはどちらも歳をとり

岡山市 浜田久米雄

片耳を搔けば片耳かゆくなり

みな食べてくれたを女うれしがり

測候所の見立てと違う花が咲き

片づけた後片づけるものが出来

年寄りのうれしさきょうは腹がへり

出雲市 尼 緑之助

定退の花見ゆつくり妻を連れ

山の家日本一だと桜咲く

パトロールぶらぶら花の土堤に行く

終バスの欠伸遠慮なし

投票所やっぱり頼まれた人にする

八尾市 香川 醉々

句碑だけがぼつんと残り橋が消え

ちんどん屋の鬻にひとひら乗る桜

大あくびしてからほめる天の邪鬼

目玉だけ淋しく光る冷凍魚

トップ屋が火のない所に煙立て

大阪市 金井文秋

皆売れたかとは娘の事だった

打ちこめる仕事を持ってぬからあせり

ジントクスにあらねど同じ席へ来る

頑張っても頑張っても劣等感が追う

酒好きに飲む口実がやっ来て来ず

青森県 工藤甲吉

我が家にも武者一人あり五月かな

人間のおしまい箸で拾われる

腹立てて帰りがぶがぶ水を飲み

金持ちに百円札を借りられる

オホーツクの海が恋しや凍魚の目

堺市 河内天笑

あんたかてうちかて阿呆で仲直り

生気みなぎって悪口たのしそ

おあいその会釈おあいそだけかえり

薫風が鯉の背筋をのばしに来

高笑いいっそ悲しい顔になる

大阪市 橘高薫風

人を待つ茶房の壁の絵は古城
長尾鷄白楽天は如何に抒す
通り抜け花の濃淡夜に入りぬ
陰陽石つつじの燃える頃となる

中尾藻介兄へ

男へもやさしい手紙書く男

大阪市 不二田 一三夫

成金が泥臭くなる土地ブーム

右にテレビ左にラジオ執筆中

咬みつきたくもなろう捨られた 犬

寄席(二句)

横山エンタツ氏死去(75) | 昭和46・3・21 |

「早慶戦」寄席の神話として遺し

チャップリン ハロルド・ロイドを顔にはめ

八尾市 飯田 一治

点滴の速度で回復する意識

空模様照る照る坊主で念を押し

パントマイム悲しいギターの音流れ

馬鹿になることに小犬も尻っ尾振り

門真市 福島 鉄児

三十二日ぶりに無事退院す

退院へ名残を惜しむ人も出来

見送ってくれる患者に手を振られ

退院のパーテイカルピス酌み交し
ふり返る病室お世話になりました

大阪市 室谷 徹舟

公約が本当にそうなら花園だ

総理までうそつきに来る選挙戦

盆栽が素直に延びて嫌われる

居眠りが出そうで守衛水を撒く

大阪市 神谷 凡九郎

妻出社朝食布巾かぶってた

若しもと云う言葉ではなす話です

着飾って先ずご自分を確める

朝食を抜いた肚ですよく揺れる

大阪市 水谷 竹荘

争いの種もつきたと老夫婦

未亡人強く生きます芸をもち

湯の宿でかえりたくない湯につかり

七十年横に歩むもまたたのし

大阪市 吉岡 美房

満ち足りて今日一日の日記書く

喋るだけ喋れ投票決めている

当選の内助へマイク差し出され

ヘルメット捨てて市民の声に化け

今治市 越智 一水

着ぶくれた貧をぬがせる春の風
その立場立場をお茶はあためる

山陰の旅

窓側に母をすわらす旅ごころ

出雲大社にて

人生の祈願かしわで四つ打ち

鹿児島市

土岐トク子

万歳とさげび母さんありがとう

よくやったやったぞ受話機はそればかり

合格のバラ色の声はテープされ

子の幸はわが幸さびしさかみしめる

岡山県

田村藤波

夫婦けんかしとれば電話の鳴る皮肉

割箸の数まで税務署知りつくし

挑戦を買ったまでだとすましとり

鍵穴を覗きたいほどのじれったさ

大阪市

山川阿茶

亡母の二十五回忌(一句)

亡くなってする孝行は手を合わせ

刺戟ないくらしに慣れて春がくる

奥さんのゴルフへ主人乗せてゆく

宿命の新芽公害の土地に出る

倉敷市

水粉千翁

あきらめを着て私は衣裳もち

責任を分けて呼吸が合うている

手料理をほめる余裕で今日が暮れ

次女結婚

よその子になる娘へ桃の花盛り

大阪市

西出一栄

夕やける陽はまだ高し春彼岸

夢を売るサツキの鉢が並べられ

チト瘦せて指輪クルクルもてあそび

親蟹が横に這うから子蟹真似

島根県

堀江正朗

見えぬから一途に思う妻のこと

頑張れと誰かが笑いかけてくる

佻しさになめた飴玉もて余し

子らに振り廻され嬉しい腹を立て

堺市

吉田圭井堂

生殺を活字自身は知らぬこと

弥次馬の最たるものに評論家

危いが居据る外にない地震

過疎過密校舎建てたりこわしたり

兵庫県

遠山可住

静かさや末が高校生になり

通夜へ急ぐ白きを桜と見て通り

僕も抜かしてと母の白髪
うちの子が落第などと思わざり

大阪市 宮尾 あいき

彦根城の観梅 (二句)

彦根城歴史がよどむ堀の色

落椿よけて古城の上り道

男前すぎて候補のたより無し

お花見に浮かれて出たか昼の月

兵庫県 河原み のる

案の定貧乏人は古米喰え

敬語まだ混えて喧嘩脈があり

案に死ねる為の働きとは哀れ

農民のかなしきさがよ稲可愛

高槻市 山田 季 賛

爪アカが気になる頃から回復期

日一日が薬ですよとさとされる

何処を向いても壁壁壁で寝るベッド

病人に一番いやな夜が来る

大阪市 有信 新之助

かじかんだ手で喪章をつけてやり

長谷寺 (二句)

やがて来る人に芽吹いて待つぼたん

廻廊のきざはし磨く沓の音

風呂帰りわたしのための青信号

八尾市 高杉 鬼遊

笛吹けば飛鳥へあらぬ人だから

怪我をした指ばっかりを可愛がり

湯豆腐がふつふつ 嵯峨は時雨なり

呼びつけてお替りの水ライスカレー

西宮市 若林 草右

驚で起こされ起きればもう鳴かず

震度四度もう馴れてますガード下

片方を打てば一方の釘ゆるみ

音のせぬ柏手遺影へたてまつる

大阪市 児島与呂志

アベックの若さ他人様気にしてず

その嘘を通じてそこに自分が居

おばはんが惚れてるよって甘えてみ

名も知らぬ星まだ光ってる朝の街

東大阪市 竹中 肖二

綿菓子のように果敢ない老の職

還暦を九十の父に祝われる

健康美ミニの脚だけ見て判り

野良猫が逃げて濡衣着せられる

宇部市 平田 実男

市議選雑感 (一句)

心とは別に手を振り合う候補

酒煙草コーヒーキャベジン飲み続け

毛糸より手編みの温かさが嬉し

帳尻を合わす視察もある期末

岡山県 横山 一声

退職金先借りをして家が建ち

あぜ道に自家用とめて米づくり

仕事に追われ支払にも追われ

赤字路線汽車もしんどそうに行き

竹原市 山内 静水

再就職をして

ご期待に添えずうろちよろして疲れ

オールドミスに囲まれ初老の身嗜み

能のない男給料思うまい

御饗米もったいなくも齒にささる

岸和田市 高橋 操子

思い切って捨てる覚悟の納屋掃除

寝返らず夢の続きをみる積り

土地ブーム村の娘が着る総シボリ

髪染めて心もしゃんとする鏡

堺市 新谷 笑痴

日をおいて話すと角がとれていた

神様のめぐみか長所一つ持ち

心よい話しに財布握りしめ

本人がなんといいますかと涙

愛媛県 村上 旭童

こんな子がいて今晚も笑いこけ

ない袖を今日は振る気で子と出かけ

残業をしてまで稼ぐ気はもたず

三十分程の午睡を大事がり

倉敷市 小野 克枝

睨めっこしながら夫について行く

聞き合せひとつ言えないことがある

愚かさの中に磨いた玉ひとつ

叱らない妻が一番こわいらし

伊丹市 小川 静観堂

男子厨房に入る魚も買うて来る

花の下のデカンショへ花が散り

啄木忌公害列島の蟹不在

人生の引継二才の孫と話すすみ

神戸市 仲 どんたく

今寝てる頃かと時差へ指を折り

師の逝きて手拍子が出ぬクラス会

別れ来し余韻大せつに大せつに

半白がなつメロで行く花の道

倉敷市 小幡 里風

花だより両手に孫がぶらさがり
ラッシュアワーみな欲張ったプロファイル

想い出を絶ち切る錆びた矢をつがえ
お隣に留守たのまれた花ぐもり

大阪市 福井野迷路

見せるため見る為め心斎橋の顔
春風にひびく心の糸が鳴る

無造作やはったりにさえある魅力
振り向いて腰から脚も鑑賞す

愛媛県 渡辺 曉童

素足でいどむ土の柔軟
むらさき匂うお彼岸の土

死角に座してきつい放言
満開の散るより外はないさだめ

貝塚市 野坂つき子

待つことに馴れてレースの手をゆるめ
たまに逢う恋は指先まで喋り

ブラウスの衿すっきりと春の朝
焦点を持たぬ女の細い指

倉敷市 竹内 翁童

物価高今日も消してる未来像
弁当をもらえば用の無い会場

社用だから乗れたグリーン車足を組み

コンピュータ俺の勤にはかなうまい

倉敷市 藤井春日

離婚とは出雲の神もおたわむれ
公書をよそに桜の下で飲み

苦労したお手やすなあと労わられ
子守唄手のつけられぬ子に育て

下関市 志賀木石

立腹を同情されるお人好し
窓開けて雨脚見てるあたたかさ

花淡く花より淡く昼の月
汐干狩近所へ配る分も掘り

倉吉市 奥谷弘朗

無愛想なところだんだん他人めき
理想には遠く辛抱しています

故郷に勝って来るぞの駅があり
欲が出て白紙になれぬもどかしさ

西宮市 島居百酒

寝て待った果報やっぱり素通りし
行楽の自然へ排気ガスの列

七人の敵や味方がある甲斐しょ
空即是色炬燵ごもりで彼岸待ち

堺市 高橋千乃子

カラーアンテナうちも立てたよ雀さん

感情のみだれチャックが引っかかり
投票日候補裏切る痛快さ

そっとミニくらべているも女の子

京都市 松川杜的

越前岬に遊びて

波のない越前岬でも足りず

水仙を添えて燈台の白を撮る

竹囲い真赤に染めて海の家暮れる

8ミリを向けて老母に叱られる

米子市 八木千代

通勤の車中眠れるほどに馴れ

メニューさえまちまち仲間だけの会

本心を書いて出してはならぬ文

古りた雛飾るわが身を見るごとし

和歌山市 垂井葵水

放言が活字になってから慌て

改札へ追いつく宿の忘れ物

横着に構えて心ビクつかせ

驚いた顔で知ってた聞き上手

笠岡市 木山要次

マネキンの顔満ち足りし春の柄

日本に生れし幸を花踊り

自惚れて聞いたが皮肉かも知れず

美容院の帰りを乱す春の風

守口市 村田瓢太

二号今日ニセのダイヤと知った悔

新生児しかつめらしく欠伸する

やき鳥へ愛鳥週間気にしてず

写真馴れして写されるこつ覚え

大阪市 中川滋雀

叔母一周忌帰省(二句)

よもぎ餅去年と一緒に賞めた味

ケーキ抱き初給をさいた娘の歩巾

つかの間の虹へ触れ合う妻という

カレンダーもめくれれば花の息づかい

大阪市 河野君子

嘘の世にまことがあってややこしい

小半日女の愚痴も疲れてる

たまさかの家族連れなり投票所

装えぬ心で土手の春日射し

大阪市 小出智子

父老いて酒も涙ももろくなり

セーターの軽さもうれし病みあがり

感情をむき出しにして狭き視野

生活に疲れて旅の夢を追う

神戸市 小浜牧人

海遠く見えお手植の杉育つ

ノート新らしく鉛筆はみな尖り

定年へ山野の若葉もえてくる

大阪市 河井庸佑

イミテーションンせいっぱいに光ってる

持つ人が持てばカンナもよく動き

本物のようねと指輪すかして見

大阪市 江城修史

花疲れとはゆとりある暮し

花愛す心に遠き花見酒

五十坂燃える日があり素晴らしい

広島県 高橋鬼焼

ヘルメットかぶれば重い病みあがり

雨ぽつり歩巾かわらぬ松葉杖

公害の空気で風船丸くなり

岡山県 大森娛句楽

浄瑠璃も人形もよし貰い泣き

棟上げの槌が日永の音に響き

陽炎が土筆と遊ぶ子を誘い

松原市 谷垣史好

野暮天なとこが女にもてるなり

恋のしこりはアーモンドチョコに似て

その言葉教えた人は死んだんだよ鸚鵡

和歌山市 土谷城石

パチンコへ十年随分阿呆な金

外泊へ焼いてもくれぬ年令になり

エプロンも一ツしのばせ里帰り

鳥取市 小林由多香

実るまでまた出稼ぎのバスにゆれ

ママさんにキーをあずけて飲みなおし

台所妻妻なりの設計図

平田市 久家代仕男

当選のその暁は握手せず

言葉尻濁し疑心がふとよぎり

来て見れば禿げたのも居るボウリング

奈良県 草深醉升

悩みごと洩らし易者の鴨にされ

開運をちょっぴり易者仄めかし

風邪癒えていつもの妻の笑い声

富田林市 浅川八郎

春なれや手と手と手と手家族連れ

真夜中も風とささやく海である

三次会これから盃洗のないうところ

大阪市 河股緑水

犬よりも劣ると恩義絡ませる

赤チンで済んだ安堵が子を叱り

明日はもう枯る花にも水をやり

奈良県 石倉旅風

誰がためともなく祈る初もうで
さりながら機嫌次第で咲かぬ花
歌麿の似合う座敷でクラス会

倉敷市 野田素身郎

桜だけは往時のままの無人駅
老眼鏡かけてもやっぱり読めぬなり
スランプへ髭もうまきは剃れぬ朝

岡山県 林 葵丘

訓練へ離職者という必死の目
嫁かぬ気の心を乱す春の風
魚まで花見に行たか喰いつかず

呉市 林野甦光

若者の夢アクセルを踏んまえる
意地づくで遂に音痴も唄うはめ
停年の会釈さびしい肩であり

名古屋 吉田水車

嫁かせて何も残らぬたなごころ
お勝手は何でもいいに困り果て
鬼瓦西陽を浴びてカットなり

松江市 岡崎祥月

子はみんな巢立ち二人でお茶をのむ

愛情をたしかめ合って妻と老い
天草に四郎の夢の橋をかけ

藤井寺市 西いわを

遅桜風を避けたか咲誇り
生花活けて花の名まえは知らぬ嬢

叡福寺太子廟

もの錆びた塔の辺りに和の刻み

米子市 林 瑞枝

うたかたの恋現実の音に醒め

他人ある日手塩にかけた娘を射とめ
住み慣れた土地栄転さえ悲し

桜井市 岩本雀踊子

五百羅漢中の一つが父に似る

ひからびた心へゼニの音がする

トカゲチヨロチヨロ六月の陽があたり

松江市 小林孤呂二

酔うほどに軍歌は苦き酒にする

未だ欲があり離れ住んでみたい親

味噌汁の甘さ鹹さも妻のもの

香川県 岡田拳法

判ずらり誰が責任取るのやら

世渡りのあかもこまめにできるもの

ケセラセラ気楽にやれと胃が泣くよ

飲み飽きた薬に生きるむずかしさ
造花でも商店街は花ざかり
スーパービル商店街を威圧する

小松市 馬場魚山

地方選たけなわ（一句）

松江市 吉岡通児

一票しかないのに西の友北の知己
多数決されど正論別にある
もう少し欲がほしいというも欲

鳥取県 清水一保

毛沢東も賛え自由も捨て切れず
学窓を巣立って親の子に帰り
愛情で解決できると云う自信

鳥取県 谷無閑

発展がないから平和な町と云い
停退の幸運左遷で救くわれる
裏町の美談市長の額をかけ

大阪市 今西章雅

工場へ通う半農自家用車
ステレオを二階に置いて階下で聞き
道路拡張補償でモーター農家建て

京都市 都倉求芽

ホステスどもの不埒さ下戸の眼に余り

春の音みな吹き上げて春の丘
長女十三まいり
親馬鹿の嬉しさつなぐ手を伝い

尼崎市 高津徹也

滝青し望遠レンズ焦点す
夕風へ島の動きもとまりなん
更衣しばし思いはほかのこと

奈良市 宮口笛生

退職の先輩へ（一句）

頑張りがきく人生はまだ途上
なあんや百円かと孫も口悪い
ゲラゲラゲラ母と子のにらめっこ

出雲市 原独仙

春うららおじいちゃんも僕もベレー帽
踏むほどに踏まれて麦は意地を出す
入学の明日へ母子の陽が長い

富田林市 岩田美代

花の下平和に続く道が欲し
野心ない冷たい手だから握りしめ
策のない双手の砂がこぼれてる

大阪市 飛田好一

断酒して（一句）

初詣で今年も酒を断つ願い

未来図が嘘でなかった都市造り
借りタオル他人の女房の匂いする

岡山市 行吉照路

耐えるのに馴れて表情無い男

留任に餞別集める役がつき

凡人の智慧は保身の術覚え

島根県 小砂白汀

風紋にドレミファソラシド風の唄

シャボン玉自爆するとこまで昇りつめ

とって置き言葉とうとう言いそびれ

岡山県 出原敬一

一枚の辞令仏壇もあるかされ

ジャンケンで叱られに行く教務室

将来を瞩目されていた餓首

青屋市 丸川初甫

わが影に愚痴をこぼしてあきらめる

年寄りの愚痴鳩時計のように聞き

好き嫌い気ままが通る風邪を引き

姫路市 隠岐不酔

算盤で検算された計算機

薄い毛をならべた櫛の苦心談

指二本うまく丸めて握りずし

岡山市 川端柳子

こんな日も地球やっぱり自転する
今一度順追うて見る今日の幸

義弟死去

過去帳に記して俗名との別れ

東大阪市 宮西弥生

入学を喜ぶ母だけひとりやせ

疑問譜を背負う女でひとり生き

空間に揺れる日もあり女親

姫路市 村上春巳

敗戦の涙を知らぬパンタロン

日向ぼこ子供と交わす花のこと

山里の春をひっそり万勝寺

東京都 増田次章

商魂の造花散ること知らぬまま

若者が急にふえてる街は春

ドブ板のこんなところに白い花

守口市 羽原静歩

一杯の寝酒へ今日の走馬燈

ネクタイをといてゆっくり妥協する

日曜のパパがしんどい宝塚

大阪市 西川誓二

水の面に散る花ビラに春惜しむ

美しい友情だからこそ手に余り

合格を位牌に知らす母子家庭

堺市 伏見 茂美

ポイントを外されお別れ口に出ず

工場跡桜は知らず花だより

矢車も世につれ鯉も小さくなり

岸和田市 葛城 伊三郎

許せない世相と一人勤を立て

公害をなくすりゃ街がさびれ出し

先生の思想が我が家の仇となり

岸和田市 福浦 勝晴

青空をわがもの顔に靴みがき

大臣を批判している縄のれん

ソロバンをはじきまくって妥協する

堺市 藤井 一二三

夫婦の短所を継いで純正品なり

角が取れてきたとは悲しい褒め言葉

新入社員来る

美智子様と同じ学校ですと言ひ

東大阪市 竹中 綾女

沈丁の落花しばらく掃かず置く

菜種梅雨菜の花漬けが膳にのる

印相のピラに実印出して見る

竹原市 森井 菁居

おい君もばやばやすなと木の芽伸ぶ
雑草の世界も周囲敵ばかり
鎌を振る汗をみどりの風がなで

笠岡市 松本 忠三

あくまでも例にとつたと釘をさし

充分に仕切った筈がうっちゃられ

責任をとれと無責任から叱言

大阪市 宮地 双楽

刑務所へ泥棒が入る世智辛さ

一芸に秀いで内助の功をほめ

ギャンブルを切つて新知事小手調べ

諫早市 原田 明春

ポケットの小銭ぬくめて待つ電話

新課長バツタのように頭下げ

記念日と名付け悪友よつて来る

岡山県 池田 古心

働けば老人病の夜を寝せず

借家でない誇り雨漏りしようとも

松江市 柳楽 鶴丸

静と動円満な夫婦です

ママさんの社交辞令と知りながら

鳥取県 森田 布堂

野仏を残して過疎の空が澄み

久し振りホクロの位置を忘れ得ず

鳥取県 鈴木村 諷子

本人が席に居ぬので褒めておく

文盲の母人間の誠言う

笠岡市 出原 真 奇

井笠鉄道廃止

心なし汽笛の音もしめりがち

化粧した車体やさしくなでてやり

鳥取県 川崎 秋 女

天下半分取った気である合格日

海猫の乱舞海から春が来る

★

北川 春 巢

医学会総会上京（昭和四十六年四月）（三句）

学問の最尖端を聴く眠さ

日比谷公園へ学会は目もくれず

東京の子もYGの野球帽

妊婦服人目かまわず手をとられ

革新の知事労組に借りができ

西尾 栞

申告へばやかれている菜種梅雨

公害も煙たなびくほどはよし

筍のぬげがらというくくり細

母の手でピンクが咲きます種袋

通夜更けてそれ者上りと思う人

菊沢小松園

拭き取って呉れる涙で派手になり

熱帯魚あばれた奴から先に死に

人間の知恵が運河を埋めはじめ

澄み切ったところで棄権すると決め

実を期待せぬ花なればこそ美しい

川村好郎

親切が三分の傘をママは貸し

あの妓まだ生きてるだろか高瀬川

茶柱に触れずお通夜の茶をよばれ

女人高野救われそうでない女

借りに来たらしスリッパも履かず

若本多久志

旅の宿にて（二句）

大学二年盲いとなりて生きる道

インテリの按摩訥々語り揉む

孫の画く汽車は煙りをはいていず

タチュテト孫とニッコリ笑い合

ハードゼミ明治の老いによくこたえ

麻生路郎七回忌川柳大会

日時 昭和46年7月11日(日)午後1時開場

会場 御堂会館(南御堂) 電話251-5820番

大阪市東区北久太郎町4の68(地下鉄本町駅南出口
から南へ200メートル)

司開 会 会 西 尾 葉
開 会 の 辞 若 本 多 久 志
換 会 の 抄 中 島 生 々 庵
同 麻 生 葎 乃

—故麻生路郎先生七回忌法要—

講 演 堀 口 塊 人

—兼 題 と 選 者—

「麻」	福 永 清 造
「生」	増 井 不 二 也
「路」	三 条 東 洋 樹
「幸」	岡 橋 宣 介
「七」	近 江 砂 人
「塔」	中 島 生 々 庵

(各題三句以内・席題はありません)

◇当日出席者も川柳塔社へ7月1日着便でご送句ください。

閉 会 の 辞 川 村 好 郎

会 費 300円(出席者に記念品謹呈)

偲 ぶ 会 1,000円(会場内食堂で懇親宴)

(宿泊ご希望の方は6月30日までにお申し込みください)

主 催 川 柳 塔 社

大阪市南区鯉谷仲之町20

(電 話 271-3 9 8 5)

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 9 —

パンとミルクの食事へ記者を待たすなり
すこしよろめきなさいと老夫夫人からかわれ
昼も電燈をつけて雰囲気を愉しみ
晩年の日記の空白寒う見る
再婚が伝えられていたが姿消ゆ
女の一生 新聞も読まないで

三十三年三月号

不朽洞句帖

暖冬にパパが日曜画家になり
地下センターここでも喰べな おさまらず
尼さんの恋 尤もだ 尤もだ
少し貯めたらというころ雲の如く漂う
エビオスを嘸んで猫にのぞかれる
死ぬことを思わぬ人となりて仰向けになれり
挙手の礼もおえまし駅長となりての
シャボテンの世話しただけで黄昏れる

三十三年四月号

不朽洞句帖

座蒲団のように汚れた元女優

生々庵居御慶事

春の風つつきるものに自家用車

三十三年一月号

不朽洞句帖

三悪も追放出来ぬままの春
世界がどうなろうとも炬燵に居
富士山はしんしんと云う雪でなし
葉牡丹のつかみどこなし哲人の如く
用を持って来てお大事にお大事に
武者小路の画なんか俺にも描けそうだ
不平も云わぬ妻だ長生きするならん
ネストンもあるじやないのとすすめられ

三十三年二月号

不朽洞句帖

余所の奥さんを鑑賞してらうちに着き
横綱がもろいたとえになりそうだ

われ老いしか千代紙を美しと見る
彼いつのまにかストの専門家になれり

朝 新聞を見たら友人が死んでいた
幕の外に売春婦を押しやれり

三十三年五月号

本社編集局主催・夕桜句会「さくら」

夕桜 風呂の帰りの人も寄り

三十三年六月号

不朽洞句帖

落選になるほどという顔をされ

物凄く垂れた柳の 何んにもいわず

老夫婦やいとのおかげばかり説き

人叱る根気もつきた顔になり

未亡人銀行だけは自分で来

年老いぬロシヤ語は疾うに忘れたり

浴衣だけあれば夏中くらせる気

大阪通信病院鳥ヶ辻川柳会「逃げ腰」

逃げ腰をもうゆるさないお女将なり

三十三年七月号

本社六月句会「朝刊」

朝刊で選挙参謀引っぱられ

南海電鉄川柳会「本尊」
本尊へにせであらうが手を合わし

三十三年八月号

杏林川柳会「京言葉・ええとこ」

よろめいておいてかんにええとこ
金かえすところがあいつのええとこさ

大阪通信病院川柳会「コマ切れ」

コマ切れですます夕餉も親と娘の
コマ切れのくらしはイヤと共稼

南海電鉄川柳会「教会」

我が血なりというぶどう酒をなめさされ

三十三年九月号

不朽洞句帖

愛情も電話をせぬと来ぬ程度

彼の天分は放埒に泌じみ出た

老人の日だが放つとかかされている

いま気がついたよに 街を静かに

夫唱婦随夫婦唱夫随で不足なく

僕等にはお盆に帰るとこもなく

脱稿近し畳のでこぼこ

本社八月句会「学歴」

大学中退声優として知られ
アメリカの夜学ですかとからかわれ

(傍島静馬)

川俣柳 初篇研究

(九十五)

前田喜代人 川端柳風
 故
 岡崎重義 高須啞三味
 清 博美 丸 十府
 藤井和雄 岡田 甫

580 上下の鳴る方へさす恥しさ

眠 狐

岡崎||「上下の音ばかり聞く綿帽子」(四・34)の婚礼の花嫁は綿帽子をかぶって目には見えぬが、花嫁は仕立ておろしの上を着ているので音がしている。「一生に一度男へなめてさし」(二二・一)の三三九度である。

清||贊「盃をなめてさすとは恥かしい(筈一・6)。嫁の方が先に盃をとって次に髀の方へさす。

高須||昔の花嫁さんにはそんなのもあったという句。全部が全部そうだったとは限らないのに、花嫁を常識的にこうだったろうと詠んだ句。

丸||贊。花嫁の初々しさ。

岡田||贊。但し、礎稿に仕立ておろしの上(かみしも)とありますが、もちろん髀だからそういう場合はありますしょうが、麻上下はゴツゴツしているのです、仕立ておろしてでなくとも身動きするとかすかな音がするのです。

581 色白なはず年に式度日に当り

同

岡崎||越後屋などの大きな呉服店に奉公しておれば、一日中、店の中に居て、正月と盆の斉日にしか休みがもらえないのだから色白になるはず——との誇張。年に二度土をふませる呉服店 一一・1 正月と六月土を踏みに出し 天五信3

清||贊。「一年に二日はひの目見せる也」(玉24)など類句多数。

藤井||贊。雛人形ともとれないことはないがそれは現代的だろう。ここではやはり礎稿をとる。

高須||現代のオフィス・ガールには、紫外線があたりすぎて「紫外線病」があり、オフィスではサングラス常用ということもある。時代が違えば……か。

丸||礎稿贊。

岡田||礎稿に色白を「誇張」とあるが、決して誇張にあらず、事実そうだったので582 うたがるた姑かくして火にくべる

長 笑

岡崎||姑が嫁にたいする嫌がらせで、こっそり歌がるたを燃してしまふ。嫁は歌がるたを上手に取る名手ということになっているためである。

清||正月早々からのいやがらせ、嫁としては正月中とてうっかり遊んではいられない。また今年もいじめられる。

姑が出ると手のちむ歌がるた 二六・36 花嫁のうきが友には歌がるた 九・12

高須||百人一首カルタのことであろうが、いくら嫁いびりでも、正月からその百枚を焼いたとは少し大げさ。その中の嫁の得意札でも「かくして」ではなかるうか。

丸||礎稿贊。陰にこもった姑のいやがらせこれでは救いようがない。

岡田||贊。

583 女房に聞ケがし謀書よんでいる

三 朝

岡崎||「謀書」は、偽造された文書、ニセ手紙のこと。女房にわざと聞こえるように声高らかに読んでいるのは、もっともらしい誘い出しの手紙であるが、実は友人から

来たことにしている自作のニセ手紙である
前田^二贊。ふところにある文は、吉原かな
じみからのもの。紋日が近いと亭主は落ち
つかない。

清^一贊。主題句は漢文調で少々固い感じが
するが、

女房の聞くやうに読む儘(にせ)手紙六〇
とずばり詠んだ句もある。

藤井^二贊。安宅閣の家庭版。しかしこの富
樫は通してくれそうもない。

高須^二自作のニセ手紙でなく、悪友とたく
んだコシラエ手紙だから「謀書」というコ
トバが生きてくる。句意はもちろん呼び出
してであるが、何かもつともらしい文体で、
断わりにくく書いてあるのである。

丸^一贊。「謀書」は高須説に賛。「謀書謀
判」など普通にいったもので、漢文調を利
かしたものとも思われない。

岡田^二贊。

584 何もなひ雛を見ている暑い事

長 笑

岡崎^二春の雛祭りには桃の花その他お供え
もの沢山で、白酒をくみかわして賑やかだ
が、夏の土用に風を通して虫干ししている
のはまったくの粗雑。蔵から出して来た雛
が並んでいく土用の暑さである。

前田^二贊。「三月は立て六月はおん並べ」
(筈二14甲)

清^一贊。飾るための雛ではないから、まっ
たく何も無い。しかし計画的に虫干しをす

るために出したのではなく、
土用中せつづく内が娘なり
うるさくてどうもなめと雛を出し
と娘の要求から
四・29

大汗で畳へ雛を並べてる
という状態にすぎない。しかし
土用干娘一日いい機嫌
六・26

一日は春めいてくる土用干
と暑さも忘れる。
傍四10

藤井^二暑い事がよく利いている。
川端^二虫干の様子がよく出ている。

高須^二「暑い事」で「虫干」をかき出した句
であるが、清説につきよう。

丸・岡田^二諸説賛。

585 きん／＼たる初会言ふ事にこまり

八 中

岡崎^二女郎を見立てて登楼すると、引付け
座敷へ通され、禿(かむろ)が煙草盆を捧
げてきて、客は下座に、女郎は床柱を背に
して上座へ坐った。そして形ばかりの三つ
もの広ぶた、銚子が運ばれて来るが、初
会の客の前では飲食せぬ慣習だった。そん
なそっけない扱いは、うちとけようもな
く「何のことはねえ初会は御儀式」(二六
25)で、話題にもつまってしまう。「きん
さんたる」は人柄の上品なぐらいいで、下
手な冗談もいえない初会の気づまりぶりであ
る。

清^一贊。但し「きんさんたる」という用語
の、他の使用例を知りたし。

藤井^二贊。「きんさんたる」は「欣々」と
「謹々」とミックスしたような初会の気持
ちではなからうか。もちろん欣々ではある
が。

高須^二この「きんさんたる」は現代では耳
遠いコトバになつてしまつたが、「当世仕
立ての利いた風の男」とでもいう意味で、
蜀山人の「深川新話」には「初手のうちは
なるたけきん／＼の見得をなし」とあり、
幸慶子の「杜撰商」には「息子様のきんき
んは本頭銀煙管」などとあり(みな受
売り)当時はやつた言葉らしい。

丸^一「きん／＼」は欣んで、もともと悦ぶ
意。詩経大雅、孟子梁惠王にも見え、謡曲
「蟬丸」にも「欣々然と悦びて……」とあ
る。江戸になつて、それが全く違った意味
——高須説の如く用いられ、広く用いら
れたものと見え、黄表紙「金々失生栄夢」
の書名にも使われたが、現代では全く滅び
てしまった。「さい日に御用きん／＼もの
で出る」(二・37)ほか万句合で、一、
二目にふれたが控えを失くして引用できな
い。句意は、欣々たる様子で登楼したもの
の礎稿のような状態ではとりつくしまもな
く話題に窮してしまう。まだ遊びなれぬ初
々しい息子が目にかぶ。

岡田^二当時の遊里文学の洒落本には「きん
／＼たる豆本多」など、盛んに出てくる。

「きん／＼」の意味は高須説の通り。句意
は丸先生の通り。

「句の生命」について (上)

北川春巢

(一) 大阪城の生命

「生命ある句を創れ」の路郎先生の大喝令のもと、私はやみくもに「生命」ある句を創るべく頑張った。所が近頃、岡本良一著「大坂城」(岩波新書)を読んだ後、大坂城の「生命」はどうだろうか、あるのか、ないのか、などと考えるようになり、ついで「生命ある句」とは具体的にはどんな句だろうか、と考えるようになったので、ここにそれを述べてみたいと思う。ご批判をお願いしたい。

「生命」(いのち)を広辞苑で引いてみると①生物の生活する原動力②寿命。生きている間、生涯③命の絶えること。死ぬこと④唯一のたのみ、よりどころ。もっとも大切なもの。となつてゐる。「生命ある句」の「生命」はこの②であろうと思う。「いつまでも寿命のある句。後世の読者にも理解される句」という意味にとつたのだが、どうであろうか。その前に「大坂城」の生命について考えてみたい。著者の岡本氏は、最近まで大阪城天主閣の主任という、大阪市の役人であった。大阪城の実物はもちろん、文献も自由に見られようし、大阪城の研究するには最適の人であつた。なお、昭和三十八年の第十回「川雑川柳まつり」にはスピーカーとして会に出席され、「大阪城の話」をされた。まんざらわれわれには無縁の人ではないわけだ。

(「大坂城」の発刊は昭和四十五年一月)私は川柳まつりの際には選者だったので、選しながら、ナガラ族で講演を聴いていたため、話は半分ほどしか耳に入っていなかったが、石垣の石の数とか、石には寄贈した大名の家紋がはいつてゐるとか、学者らしい研究の話に興味をそそられたものであつた。

所が右の本を読んでみると、石垣の石の数は、大雑把に内輪に見積つて約四〇万個、石垣の総構築費は、現在の物価で六五二億四七三〇万円と推定されるとあつて、今さらながら驚いた。八年前に「大坂城の話」を聞き啣りして持った興味を、今や「大坂城」を読んで満足させたわけであるが、私はここで「大阪城の生命」を考えるようになったのである。

大阪城の石垣の石の数は、恐らく将来とも変わらないであろうが、その石の値段は、年と共に変わる、と思われる。やはり大阪城は生きてゐる、というべきだろうか。この物価の点に関しては、後で触れたいと思う。

大阪城はもと、本願寺の石山(大坂)坊舎(お寺)であつた。石山本願寺と称した。織田信長が天下を取つてからも、矢銭の献納などしてゐた。しかし、その後次第に一向一揆の勢力も強くなり、石山本願寺も城のような形に増強され(本願寺城ともいった)、信長に対しても敵対するようになっていった。が遂には信長に抗しきれず、明け渡すことになつた矢先き、自ら火を放つて焼いてしまつたため、石山本願寺(城)は信長の手には入らな

かった。城の「生命」はこれで絶えたといふべきだろう。信長は直ちに部下に命じて、本願寺城の遺構を利用して城の修覆をはかり、間もなく城は体裁をとり戻して来たのである。城の再生といふべきであろうか。が、信長は本能寺の変で急死したため、大阪城を自分の居城とする機会を持つことはできなかった。

信長が大阪城を修覆させた部下の中にはもちろん羽柴秀吉もまじっていた。本能寺の変の後、光秀を天王山に敗った秀吉は遂に天下を取り、大坂城の主となり、一五八三年に入城した。

秀吉の大坂城は豪壯なものだったらしい、が現在でははっきりしたことは分らぬとのことである。秀吉の死後十年足らずで、大坂冬の陣が起こり、一旦和議が成立したものの、大坂城は外濠を埋められ、翌年の夏の陣で落

城し、台所から火を発した城は、石垣を残しただけで、建物その他はすべて灰燼に帰してしまつたのである。大坂城の生命はここでまた絶えたと見るべきかどうか。

その翌年には徳川家康も死んだが、二代将軍秀忠の代になって、大々的に大坂城の再建工事ははじまつた。工事は実に大工事で、第一期、二期、三期と分けて行なわれ、前後八年間もかかった。落成は一六二九年である。

しかし、われわれが現在見る大阪城は、秀忠のその時と同じものかといへば、決してそうではないのである。その後も落雷によって一部が焼けたり、あるいは幕末の鳥羽伏見の戦で、大坂城に幕軍がいたのを、長州兵が攻めて来て、城は全部焼けてしまつたこともあつた。また昭和六年には鉄筋コンクリートで天主閣の復興を見だし、昭和二十年には太平洋戦争のために、京橋門その他が焼けたりし

た。(大坂城は明治期に、大阪城という文字に統一された由。小稿においても混同して使つてしまつた。お許しを乞う。)

以上が岡本氏著、「大坂城」の大坂城変遷の様子をきつまつたものである。

ここで私は思うのだが、大阪城ひとつを例にとつてみても、その歴史の変遷はすこぶる変化に富んでいる。「大阪城」という文字を見て(あるいは発音を聞いて)われわれが頭に浮かべる印象は、昔の人が「大坂城」という文字を見て(あるいは聞いて)頭に浮かべた印象とは違つて苦である。

また現在の大阪城の誕生をいつと考えたらよいかが問題だと思ふ。またその誕生した大阪城の「生命」が現在までつづいているといつてよいかどうか、すこぶるむずかしい。話を川柳に戻したいと思ふのだが、話を新にして考察を続けよう。

核もよいが

高鷲 亜鈍

核もよいが人間性は残すべし

プエフロスパイ艦北鮮に拿捕される

ラオス・インドネシアオブザーバーの

アスパック

避けられぬものか血で血を洗うことだけは

あさつてに学徒動員の自由主義

殺すより殺さぬための防備とれ

いのちを賭けてゼニにならない詩集です

死屍累々はゲバ棒とヘルメット

させるものあるから血で血を洗う

大声の狂人に街つんば

地球から月へトンボ返りの足の裏

(一九六九年七月二十一日アポロ十一号月面到着)

月面へ世紀の草鞋遺棄される

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

救いようない沈黙に雨の音

岩田 美代

夫婦間の沈黙、親子の沈黙、兄弟の沈黙、情と理屈の組み合った、しらけきった対立の沈黙を救ってくれた突然の雨の音。折よう降ってくれた雨の音で、この重い沈黙も、和やかに解消されることでしょう。

枯枝に何か囁く冬日差

一本杉写して水の独り言

本田 恵二朗

流石は老練。囁く冬日差。水の独り言。ペテランならでは言い得ぬ感覚である。と言つて、この言葉が誰かが真似しても駄目でしょう。

艶物の稽古相手の腫がまぶし

若柳 潮花

これでこそ、舞踊の芸も生きてくるといふもの。潮花氏の独壇上の句である。

消防車走れば弥次馬としてあわて

松下 梁水

としてあわて、は川柳眼としての言葉。「として」の三字はこの句の命です。

姑となるこころをせめて地味に結う

八木 千代

謙虚な、やさしい、良い姑さんになろうという心使いを髪のかい方にも、気を配られた若いお母さんに、こんな佳句を生ませた。御幸福な新夫婦が目に見えるようです。

枯薦に石仏がんじがらめなり

垂井 葵水

ユーモアの妙なこの頃の川柳に、こんな愉快な句に出合うことは、古い言葉だが、砂漠のオアシスだ。あとの三句も楽しい句。今後共このようなユーモアのある葵水調を出して欲しい。

家に居て半端扱いされる人

トンネルへは入った儘の暮し向き

西 いわを

この間迄、療養生活をしておられた、六十有余才の句主の心境句として、つくづくと鑑賞させていただきました。あとの二句も通じて、何回も何回も読んでいる中に、どこか、自分の存在に自信のある片鱗を、句外から受けとられたことが、何よりもと存じました。

長男の下宿へ長男とゴロ寝する

弘津 柳慶

父親としての気持が偲ばれて、共感久しうするものがある。長男が、いつもこの部屋でゴロ寝しているであろう通り、親父もして見る。そして自分にもこんな時のあったことを天井を見つめながら、回想している。情味のある川柳らしい川柳である。

紙テープ切れた所で過去となる

谷井 扇水

互に持ちあっている間が現実。切れた途端に過去。川柳というものの情実が、この一本のテープにつながっている。

四月号二賞中間発表、戸田古方選訂正

逃がすまいとする欲だけはまだ残りは
は板尾凡吉氏

近作柳梅

秀句鑑賞

—前月号から—

菊沢小松園

妻で寝て母で目覚める繰り返し

関 美子

いみじくもうたう女の性のなみなみならぬことを！生活のうたも 此処まで具象化されて、しかも美化されては只々天晴れという言葉以外他に何も無い。要点を突いていて、嫌やらしさが無いのが取柄だろう。

一城の主としてのしまい風呂

三宅ろ亭

ウーマンリブを裏から見た、出の上五の句語が面白いので上品な点を誘うユーモア句としても優秀なものになった。世間の眼を通れて本当の憩いの場と云えないことも無い何事も思いようであり心の持ちようである。

昂奮したわたしへ遮断機が降りる

嘉数 千代香

はっと我に返える眼の前に遮断機がおりる 其処に人生の切破つまった断層が生々しく口を開けた。生きて行く苦悩が出て痛々しい。

愛狂う日もありかもめ波に浮く

嘉数 千代香

この作者の今月は四句とも充実してよい。かもめが波に浮いている風景は決して快よいものではないが深刻な場面を美しく書き上げた芽えを買う。

筆談の寂しさ話題とぎれがち

柳原 静香

言葉の不自由さを筆で代えることのもどかしさ当事者でなければ味えぬことだ、情景がよく出ている、句にされた努力を買う。

バックミラーに寂しい女は 私か

小谷 葉子

この懐疑的に現わされた内容が果して適切に誰にでも共感を呼ぶかを恐れる。いささか奇麗事に過ぎ物足り無さを覚えるのは私だけだろうか、すべてを美しく見るこの人の長所

であり短所でもあると言えないことも無い。

満たし過ぎバネのきかない子に育て

木村 弥栄子

過保護のママへの頂門の一針、中七がなかなか面白い、切りの育てとする方自然で反って耳に快よいよう思うが如何。

宴席の社長代理は酌ぎまわり

小川 耕三

これも世渡りの代理の心情、あわれ生きんがための悲しい演技、涙かくしたピエロが此処にも一人。

目的が出来てヘソクリ急ピッチ

垂井 千津子

目的のないところに活気はない、ヘソクリも目標が出来て急上昇、余裕のある家庭の一面も窺えて面白い。

七人の敵が今夜もだしになり

本間 満津子

身辺雑記の軽いスナップ、男性へ便利のよい格言があって色々利用されている。万事心得て笑顔で送り出す奥さんも、して遣ったもの主人公もこの程度では平穏な家庭生活の一コマである。

詩人とヨーチン

東野 大八

この数年、朝毎の私の日課は、竹かごを背に負って、老犬とともに木曾川の河畔を歩くことである。寒山拾得気どりの風態である。

木曾川もここは中流で、川幅はかなり広い。御嶽や日本アルプスに連る信州や飛驒の山々をめぐってきた水は、かなりの水量である。それだけにつねにささやかな流水があるわけで、私はそれを拾って肩越しにかごへ投げ入れて歩くわけである。それらを庭先に積みあげておくと、格好の風呂のマキとなる。さて昨年の秋のこと、立ちこめた濃い川霧の中から、一人の男が不意に私の前にとび出してきた。田舎のこととて、みず知らずの相手だが、私は声をかけた。よくみるとその人物は、六十の坂もとくに過ぎた老人であった。それが上下一対の青いトレーニング用の衣服をまとっているのである。いうまでもなく、朝の体操がわりのランニングと知れた。

「いい気持ですね」

と老人もさわやかに答えた。頭も眉も、そして蓄えた口ヒゲまでも白い。私は一見して、路郎先生に似ていると思った。

爾来、半歳。朝の六時前後には雨を除きこの老人と行き合うのである。だが、向うはつねに軽快に、足どり早く現れ、過ぎていくので、やあやあ、とごく親しげな会釈を交し合うだけである。ところが、このほど、やっと肩を並べて話し合う機会がきたのである。支流の加茂川と木曾川に流れを一つにする地点が、双方のUターンの個所に当たっている。そこでランニングの老人が、大きな石の一つに腰を落して、一息入れているところへ、ぱたり私は行き合ったからである。

堤にある並木はすでに葉ざくらで、そのあたりの畑の麦は、早くも小さい穂先を輝かせはじめた。爽涼の五月の青空がやけに高く、そこに雲雀が啼き、遠くの山でうぐいすの声が木だましている。たがいに会釈しあって、私も考人の近くの石に腰を下ろす。

「石は流れるものではないかな」
老人の第一声がそれだった。

「私の尻の下のこの大石は、つい向うの猫柳の株んとこにあったんですよ」
この間の増水からだ、と私は思ったが

「石も流れましよう、さすが（流石）にとの言葉もあります」

と私はニコやかにいって一服つけにかかる。

「なるほど、石で歯をそぐ例もある」と老人はつぶやいた。「漱石枕流」の故事成語の漢文よみを指している。夏目金之助は、世の流れと別に自分の生き方を貫く目安に、許由対孫楚の、かの有名な「石でそそぎ、流れを枕す」の言いそこないの問答から「漱石」のペンネームを見出したのである。この老人さすがに品のいい口ヒゲを持っているだけのことはあると内心うれしくなり

「永き日や欠伸うつして別れいく、漱石ですよ」

老人は、じろりと私の顔をみていった。

「俳句をおやりで：？」

「いや、川柳です。このごろではおなじょうなもんですがね」

ほう、老人の顔もほころんで

「私はシャクナゲです」

と改めて相ごうを崩した。

老人は俳句のほかに漢詩もやるという。

「李白、杜子美は川柳とはじつこんですよ」というと老人。

「いや、私は韓愈です」

とキッパリ言った。かなりガン固な御仁だ。

気性まで路郎先生に似てるのかな。そこで私

「推敲（すいこう）という言葉をご存じですか」

「句をすいこうするというあれ？」

「そうです。この由来は韓愈からです」

洛陽の詩人賈島が、詩作にふけりながら道を歩いていて、「僧は敲く月下の門」のくだりで戸をたたくのがよいか、おすのがよいかにひっかかった。親友を久しぶりに訪ねた僧侶の自分の詩なのである。とつおいついてるうちに、ついしらす大名行列におつかってしまつた。無礼者とはばかり、日本流でいふれば刀の柄に手をかけるところだが、まあ待て、といつてとめたのがカゴの中のおとの様。ほかならぬ、この人こそが韓愈である。肩書は洛陽の警視總監といつたところ。賈島がわけを話したところ、そこは唐詩選六家の一人の韓愈先生である。

「久瀾を敍するは意さかんればたたくに如くはない」と唐朝国学院大学教授の資格もそえて、相手の詩作に助言したことである。「いや、そこまでは知りませんでしたね」老人は明るい顔で会釈を一つ。

「大分汗が冷えてきました、また次に……」老人はそういつて再び行動を開始した。私はつぎの機会には韓愈談義が必ずであるであろうと察し、その夜、久しぶりに中国詩人選集の韓愈をとり出してみた。

韓愈の詩文集は「昌黎先生集」と呼ばれ四十巻ある——というのにはじまり長大な解説がつけられてあつた。だが、推敲のくだりはない。そのかわり、つぎの吉川幸次郎先生の跋文に吸いつけられた。大要つぎの通り。

「韓愈には悲哀の詩が少い。彼は悲哀をまゐるで忌避しているようにみえる。このことは

彼が悲哀とがらんば無縁であつたことを意味しない。いなむしろ、本来の性質としては、悲哀の感情に富んだときえ、彼自身別の詩でいう。

韓愈の新しい態度は何んによつて成り立っているか、彼は従來の詩人が悲哀の契機としてうたいつづけたもの、つまり人間の受ける諸種の限定。死はその最も大きなものであるが、それらに対する悲しみを、もはやあえて悲しみとしなかつたのである。或いは悲しみとしつつも、それらは従來の詩人がうたうに任せたのである。人間の受ける限定、もしくは万物の受ける限定、それは彼にとっては確定したものであり、もはや彼自身の悲哀の対象とはならなかつたのである」

韓愈は、李白、杜甫の汲古の詩情を踏みつづ独自のロマンを開拓した。杜白は七言をふまえたが、彼は三言四言五言六言七言九言を句にまじえ、発想の内容に応じてリズムをかえた。つまり一句の字数に変化をもたせることを試みた。旧來の定型を破つて、独自の表現に新しさを求めたのが韓愈であつた。

私は、清の乾隆帝が、唐宋の詩家を評して「大家と名家とは、なお大将と名將のごとしで、その体段は自ずから同じからず」の言葉を思い出した。今日の川柳に通ずること万々であると思つたわけである。

韓愈の知識を頭に詰め込み、さて、ランニング老人の出会いに備えたわけだが、不意の旅十日が社命によつて訪れ、かごと愛犬を久しく忘れて帰着したわけだが、旅の疲労で齒

を病み一日街の歯科医を捜した事である。医家の中で、つねに繁忙つねなきは歯科医である。数軒をたずね歩いて、やつとこのことで閑寂な一軒を横丁に見出した。

さて、古びた治療台一台きりの寒医の主は——双方、思わずアツといつたことである。その相手の先生こそ、彼のランニングの老人その人にほかならなかつたのである。

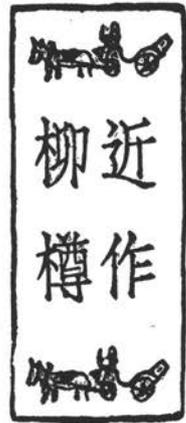
はやらぬ歯科医、それは技術の巧拙がきめてである。私の病齒は野戦の粗暴な軍医をほうふつとさせて終つた。強烈なヨードチンキの刺激は、かくて唐宋の詩人を吹きとほした。私は今もその老人と朝毎にあつても、二度と語ることをしなかつた。名詩人韓愈も——チンに痛ましくも敗れ去つたのである。

▼次号へ「路郎先生の手紙」という好読みものをいただいております。(編集部)

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 762 三四五二—四
夜間 762 四四〇八



川村好郎選

大阪市 小谷葉子
 猫柳子無き女にこぼるるよ

耐えぬいた私に黒が似あうのか
 ともかくも片道の恋に灯をともし

花言葉に付着していた恋の罨
 鏡に写らぬ悔いを胸にたたむ

長谷寺
 廻廊の牡丹に明日の色を選び

島根県 堀江芳子
 運ばれる身にのろすぎる救急車

酸素吸うベッド見つめる子へ詫びて
 病舎から抜きたい春の陽が光り

面会の夫へはずんだ疲労感
 口重い主治医にまたも聞きそびれ

守口市 岸本豊平次
 怪かじる子のリュウとした背広

舌打ちはしても笑顔を崩さない
 ここまではとぼちり来まい血の淡さ

寝付かせる童話一つを余らす子
 笑う金泣く金程に縁がなく

大阪市 竹内一世
 朝夢の余韻残って嬉しい日

欲望はつきなし文珠の千羽鶴
 断った見合に悔いの残る夜

同居してよかった姑の物わかり
 自慢より失敗談に拍手湧き

富田林市 木村弥栄子
 糸垂れて湖畔に春の風情釣る

出戻りの女の謎は解けぬまま
 遺言となった教訓こだまする

ぬか味噌を箸で取り出す嫁が来る
 お隣の桜はうちの庭で散り

竹原市 三宅不朽

母だけの知る亡父の衣の綻びよ
今日もまた汚れた踏絵抱いて寝る

肝心なところでエリート笑うだけ

レモンティー言葉を選んでいるふたり

大阪市 柳原静香

負うて来た孫と別れた背が寒い

もう祖母になりきる顔で買うおもちゃ

花と人に酔うてベンチに身をちぢめ

病む父のテープに泣いた披露宴

羽曳野市 麻野幽立

一票へつながらる道の仮舗装

網棚へ想い出の品捨て断つ未練

税金を納めるだけの途中下車

真夜中に爪切る人がいる夜汽車

岡山市 山田止水

公害へ抗議か桜の白い花

人様の世話引き受けてから重荷

流行が一つの顔をもてあそび

ようやくの春へ雑草引き抜かれ

島根県 東原福子

紙雛に初恋淡くたたまれる

おトイレの鏡に素顔のぞかれる
手鏡に春がこぼれて病むベッド
石けって心のそこをのぞかれる

尼崎市 中谷利美

足元に火がつくまでを頬かむり

妻の好く柄に値札がマツチせず

腐っても鯛 一目を置かす父

責任の持たぬ自由を振りかざし

松山市 谷のぶお

競り市で花の命のたたかれる

失業をしてもやっぱり靴はちび

鈍行の人生終着駅は知らず

捨て石のつもりに我執つきまとい

島根県 錦織文子

春の音って何色かしら土崩えて

末っ子巢立ち家飄々と風ぬけて

この憂い鏡ぬぐってもぬぐっても

憂愁のロマンを抱いて明日へ生き

大阪市 阪上十止庵

あっと驚くことも記事なら二三行

老妻を美人と世辞も極まれり

午後十時チャンネル子の手にあり眠る

いつしかに叱らぬ父を遠く見る

鳥取県 両川 洋々

見返してやる気六法全書繰る

酔わぬにも困り酔うても困る酒

おもちゃ売場のおもちゃを借りて泣き止ませ

撒きようでもの言う金と言わぬ金

水見市 関 美子

言い訳をしてまでベレー帽が好き

事故検証ネオンの雨をあびながら

石橋をたいただけの北枕

一人乗り一人降りてく辺地バス

小松市 村井 城南

入口を少し開けてる五割引

ゆっくりと歩けば麻痺の足素直

横着な足ではない麻痺の足

呉市 楨田 英詩

新太郎の酒量が知れた里帰り

石橋を叩けば道もはかどらず

几帳面だから白黒つけたがり

寝屋川市 福富 隆子

場ちがいの道白昼に赤毛の娘

カッターは家で洗えと値上げする

履歴書が完べきすぎて不採用

備前市 武内 雅堂

母と娘の対話うれしい初任給

春夕焼け女の盛りかも知れず

玄関へ迎える友の寂しい眼

鳥取市 山形 春海

馴れすぎた道で自転車けつまずき

流行歌とびとび孫についてゆき

真夜中の受話機合格響かせる

八尾市 高杉 千歩

命捨てて挑んだ過去を持ち歩き

百までも生きる積りの趣味ひろげ

あるじ二人にこき使われて老けこめず

大東市 荒木 鶴翠

鬼っ子の美人とおかしなほめ言葉

ぬれ衣があっさり晴れてまた不安

垣根越し声かけてくる句友あり

守口市 樋口 一峯

春にさとく木の芽ひそかに紅をさし

こぼれ梅この枝だけが先きに咲き

朝食のパンに患者は慣らされる

東京都 古川 良光

後悔も少し混って終電車

出産の妻へ遅々としてカレンダー

うぐいすの声もテレビの世話になり

今治市 萬本昌道

宥されぬ思慕友情のあるかぎり

投票の依頼ビジネスめく電話

口にするまでを読みとる苦勞性

大阪市 黒田真砂

女の意地通して世間狭く住み

逢いたいと思う心のベール剝ぐ

甘い言葉さらりと女の城守る

大阪市 大住文子

うたた寝の肩をたたいた夢の母

心の灯求めて朝の道急ぐ

疲れ瞳に一服なさいと白湯がたぎる

羽曳野市 今井岳太

高嶺の花あきらめ切れぬ恋の意地

和食ならでは味わえぬ四季の味

味噌汁の味定まらぬも新妻の味

鳥取市 有田鹿の子

故郷の月もやっぱり一人ぼち

亡き母と寂しく八十路を生きる父

愛媛県 小笠原仲美

マヒの手の老父と別れを握りしめ

岡山県 嘉数千代香

ライバルへ送る拍手の掌が鳴らず

エスカレーターの流れ心なき妥協

女教師も春です小さなイヤリング

米子市 増田竹馬

明日の晴れ信じて老のスケジュール

生きている倅せ鷺に起される

口先の奥に打算のにおいする

大阪市 河原林比呂路

今日使う仮面さがしている男

会社ではベテラン家では世話がやけ

急所つく話あくびに腰おられ

東大阪市 落合思月

パンタロンぬいで家ではチビた下駄

孫のほしいものをあたえて叱られる

どんな風吹いたか妻が化粧する

鳥取市 林露杖

手鏡のくもりの奥にあるエレジー

足のケガ診せるに化粧念を入れ

酔眼に妻の笑顔が気にかかる

純情な二人へはたがじれてゐる
子夫婦と同居ソフトな線を引く
どう言えば納得するか酌ぎこぼす

和歌山市 樫 村 ふみよ

明けがたのサイレン不安まき散らし
鳥籠が黙ってしもた女客
句題練りスリ鉢の手が留守となり

愛媛県 小 山 悠 泉

愛しかと胸に刻んで受話器切る
賞でる人なし桜咲く過疎の里
ていねいな言葉冷たく断られ

新宮市 大 矢 十 郎

セールスでひと皮むいた人と知り
見送りへ追出すような目に出会い
腹さぐる眼が盃を持って来る

和歌山市 垂 井 千寿子

早春の日射しと愛をこめて編み
家計簿をつけて茶の間の日課すむ
子の成長甘えてほしい時もある

和歌山県 ふきあげ 虎 城

足跡を消す漣に音がない
街の子に北斗教える空がない

ある坐礁妻のくさりで浮上る

奈良県 岩 井 本蔭 棒

合格のあとは神様ほっとかれ
この花が見納めになる人もあり
会心の短冊客の無関心

大阪市 堀 口 欣 一

公害のおかげ百万都市となり
何思いけん女房のペン習字
写真では総理と並ぶ知事候補

守口市 野 呂 杜 月

四人目も逝って愈々我れ一人
順ですとは慰める気かおどす気か
バスに乗り遅れてよかった花を見る

大阪市 白 石 良 圭

先斗町こんな所に質のれん
入園へ対のパンタロン自家用車
物想う窓ゆっくりと明けてくる

藤井寺市 古 結 百 水

山よりも野よりも造花の下で酔い
良きことのあるちよう夢の浅かりし
本能の残火吾が老齡をいら立たせ

竹原市 楠 貞 子

凡人はいいなと思う膝を組む
焦げたパン差出す愛の無い日なり
倒産へ二号さんだけ連れて逃げ

姫路市 大 原 信 好

ハイ分りましたの電話又つづく

浪曲をきく春の宵の感傷

あと一分春眠しかと味いぬ

鳥取県 近 藤 秋 星

燕来て見れば選挙の真っ最中

遠方の桜が好きな自家用車

休耕にして静観という余裕

八尾市 高 杉 力

栗色の髪が最終バスを待つ

ポケットに童話を詰めて旅に出よう

覗かれた独り芝居の楽屋裏

今治市 古 野 伶 人

妻の客次ぎ次ぎに来る妻の留守

皆様のよう素直に尾が振れず

財布など奮発しよう春の街

大阪市 松 岡 進

病人をいつわる言葉に笑みも入れ

右向いて左を向けば財布空

きびしさを知らず就職列車行く

大阪市 本 間 満津子

(句主は盲人の方です・代筆)

柳の芽撫でて盲が春を待ち

朝食の時間なくとも化粧する

筍を喰べただけで盲の春は済み

浦和市 小 池 鯉 生

目障りな蜘蛛にも黙る日向ぼこ

太陽のご気嫌取りはせず厚着

大洲市 堀 内 暁 風

栄転もやはり淋しい別れの日

男気を出してのっぴきならぬ破目

羽咋市 三 宅 ろ 亭

雑草も与えられたる花をつけ

ローカルの車掌週刊誌を拾い

新潟県 高 野 不 二

送られる酒は酔えないまま別れ

子に弁当持たせ俺にはパン買わせ

岡山市 武 元 柳 子

母猿に子猿が負われ春うらら

遠からず廃止のバスに二三人

河内長野市 森 本 黒天子

大阪弁同士で同情板につき

花には嵐がつきものだよと雨を出る

松江市村 松 醉 歩

馬鹿野郎とは僕のこと灯を消して

内職の指に指輪が邪魔になり

仙台市川 村 映 輝

CMの分まで購読料とられ

共稼ぎ財布は他人のように持ち

青森県 岩 淵 一 星

水仙の恋に邪魔する春の雪

パイパスに煤けた家並見捨てられ

米子市 石 垣 花 子

老の坂まだ青い鳥追いつづけ

国訛り消えたくましく子は帰省

大阪市 白 井 孝 子

足音に話題を変えた手のしぐさ

師の右手添えれば花が品つくり

高知市 竹 崎 寛

熱い息だと知ってるおんな手

竜宮もこの頃汚れてきた便り

七尾市 松 高 秀 峰

踏み台にされて喜ぶ親であり

手も足も出ぬ日帰って妻と飲み

大阪市 藤 田 頂 留 子

飲食のたかが知れてる女連れ

四年分のおじぎ候補者して廻る

島根県 中 島 英 子

借金を背負い自慢の家を建て

洗礼をうけて独身押し通し

和歌山市 増 田 め ぐ み

舞い降りて人を信じぬ小鳥の瞳

和歌山市市電廃止

春雨のお別れ電車乗り遅れ

新宮市 小 山 峻

明日にでも天国が来る演説会

成功を祈ると故郷追い出され

島根県 大 森 孝 華

梅咲いて今日を喜ぶ一ページ

我のみに問う心に哀れとも

下関市 志 賀 汀 花

倚る窓に昼の月ある花づかれ

仏壇の灯も春の色で揺れ

宿毛市 山 本 窓 花

こぼれ種春を忘れず咲く根性

酔客のくりごととして気におかず

羽曳野市 大 峠 可 動

かえりみる心よ明日も崩れるな

明日を呼ぶ力残して父と酌む

兵庫 高 橋 近 江

指切りで去ぬママごとの場は帯かず

欠伸して背伸した猫どこへいく

大阪 平 井 露 芳

出雲大社

大社駅こもついでに拜んどき

日御碕

ファンダー捉うに海猫遠過ぎる

和歌山 島 本 亜 矢 子

待つ言葉くれず笑顔の別れ道

すみませんと言える娘になり里帰り

堺 市 栗 本 藤 持

日向ぼこ出来る身になりしたくなし

花輪立つ呉越同舟やくざの死

松原 玉 置 迷 朗

折れたくはないが折れて和を保つ

春には春の煩惱人生か

大阪 西 本 保 夫

突発の事故へ平社員狩り出され

上長に恩を着せてる平社員

貝塚市 行 天 千 代

夫婦でも心の中まではいれない

三回忌集まる顔ぶれ少し減り

大阪 藤 本 ま さ み

おれ阿修羅カラスに頭こずかれる

怪物掃除機ベガサス曳くのか吸取車

島根 安 達 潮 音

論争をさけず老の血まだ枯れず

しがみつくと土地半生の夢があり

愛媛 渡 辺 都 留 逸

ボタン穴さえ狂う年配

老妻と晩はうどんで雨を寝る

高槻 山 田 ス ミ 子

まあまあで二月も終る春が来る

割切って子供に話せば聞いてくれ

今治 大 本 バ ッ ト

最後まで名前の連呼地方選

料亭で無ければ食えぬ瀬戸の鯛

今治 伊 藤 一 郎

ステレオは買うが食費は入れもせず

中一の覚悟丸刈から始め

大阪市 花田繁子

八尾市 古川鶴声
糸桜春を告げてる当麻寺

お花見の支度の酒が先に減り
珍客に家中猫も落ちつけず

今治市 真山国彦

河内長野市 井上喜醉
大胆な行動批判の目が光り

船乗りの嫁に無口な娘をすすめ
ゴミの山みんなお金で買うたもの

今治市 今井松花

竹原市 簗田浄美
散る花よ二人でいたい夜である
新宮市 川上久司
ふところが教えてくれた行楽地

自棄酒をぞ気嫌やなと叩かれる
胸薄い娘がひっそりと仕立物

今治市 原田輝親

京都府 矢野晴光
犬と猫留守番してるよい天気

待合所読む人編む人眠る人
ロボットのように仲居がついで呉れ

大阪市 鈴木生仏

泉佐野市 大工静子
家柄だ人柄だとして縁遠く

天王寺鳩も仏のような顔
孫までが妻の味方になって来た

大阪市 木村久子

大阪市 木村渚水
物価高おかまいなしに妻太り

タレントの人なつこさが票になり
とりどりの花も供える春なれば

大阪市 岡部シゲ

大阪市 吉野志津
バス席を譲る娘に親はなく

排気ガスにまげず街路樹芽を出した
厄よけのそばも味よし水間寺

大阪市 村島秀村
先祖の墓夫もねむって近くなる
つくづくし頭上げてはもぎとられ



お待せしました！

清水白柳遺句集

—七月十一日路郎忌に発売予定—

序文・中島生々庵主幹 (定価六百元・送料百円)

★白柳さん、正に全国川柳界にとっても大先輩として、貴重な存在であった。

(中島生々庵)

★私が出版した句集(老いの坂と親ごころ・子心)は二回とも、白柳さんの温い指導と援助を仰いだ。(若本多久志)

★柳社を超えて、東奔西走川柳の社会化、新人の開発育成に尽され、それを生き甲斐にされた。(川村好郎)

★川柳に対する情熱と執念は、自ら川柳狂を名乗るにふさわしいものがあつた。(西尾 栞)

★川柳生活四十数年の想い出の中に白柳とはただの一度も口争いや口論をした記憶がない。(菊沢小松園)

急速の直前まで、句を集め、B6版のスタイルまで考え、いつでも出版できるように準備しながら、ついに「清水白柳遺句集」というタイトルにかわってしまった。白柳さんの声は聞えなくなつたが、その柳魂はこのように生きている。(八月の本社句会を「清水白柳遺句集」刊行記念句会とします)

発行所 大阪市南区鯉谷仲之町二〇 川柳塔社

川柳塔社常任理事会

五月四日午後六時から本社階上で常任理事会開催。まず編集部から、諸物価高騰による窮状がうつたえられた。週刊誌の三十円がアツというまに百円の時代である。

「清水白柳遺句集」刊行委員長である西尾栞氏や、八木摩太郎氏、菊沢小松園氏から白柳遺句集のこれまでの経過報告があつた。栞摩太郎、小松園三氏は、この数カ月間、白柳遺句集に全力投球をされてきた。遺族の方々も句集完成へ前記三氏に頼り、発刊の日を待つておられるとか。

句集の題字は生々庵主幹、見返えしは玉青画伯という豪華さである。句は三氏による合議選の慎重さだ。八月の本社句会を「清水白柳遺句集」刊行記念句会と決定。

あと一と月に迫つた路郎忌川柳大会には多久志大会委員長も万全を期しておられる。

出席—栞・古方・多久志・圭井堂・柳宏子・形水・文秋・小松園・葵水・摩太郎・一三夫諸氏。

感激の句碑除幕式

浜田久米雄

(カメラ・万的・天笑・新之助氏)



満場は拍手に湧いた。二時から兼題五、席題三題の披露がすみ閉会の辞で大会が盛會裡に幕を下ろしたのは三時四十分であった。出席者百四名投句者五十一名という大会は吉永町はじめて以来のことである。柳魂の触れ合いのありがたさをしみじみ味わったのである。主催者側として各位のご協力に感激、深甚の謝意を表するものである。

★ 備前川柳社二十五周年、久米雄句碑除幕記念吉永町文化川柳大会

(三才 軸吟のみ)

新緑に毛虫としての詩があり 秋 要
 新緑へ偏屈そうにいる枯れ木 秋 月
 長男誕生樟の大樹の萌ゆる朝 山茶花
 新緑一ぱい孫あやうげな二歩三歩 九呂平
 友情がだんだんピンク色になり 三林坊
 失意の夜ピンクの薔薇が黒く見え 胡風
 三度目も女兒なりピンクが編みなおす 松恵
 三人目生んでもピンクがまだ似合い 弥生
 居眠りも派手に女の旅終る 惠二朗
 居眠りもして目立たぬ席運び 武元柳子
 居眠りをする間もお札の舞うた夢 川端柳子



句碑と久米雄氏を囲む国鉄一家

昨年十月建立した久米雄句碑、路郎賞の句「握手した手が離れないまま坐り」の除幕式は四月二十五日十時から久米雄居庭前で仏式により開眼供養がはじまった。邸前には生々庵主幹はじめ奈良から下関に及ぶ柳人と近郷の人百五十名がぎっしりである。孫真代の手によって除幕されたと同時に荻野師山、三宅栄両師による尺八琴の合奏「春の恵」が演奏され満場の目と耳が集まる。つづいて来賓、柳人代表の祝辞、記念品の贈呈、祝吟、祝電の披露、横山一声のこの句の朗詠、謝辞があった。式が終りカメラの放列がしばらくつづいた。

その後大会は新築なった中央公民館に移り午後一時開会、来賓と柳人を代表して岡村久志良氏の祝辞、祝電披露の後生々庵主幹が三十分にわたる川柳人としての心構えを説かれ

居眠ってもおれず妻子のベルが鳴る 好郎
 鉄骨を男同士の声が組む 九呂平
 父の骨母の骨恋い草むしる 松恵
 骨のある飯にも馴れた人ざわり 次

骨抜きにしといてお金の事にふれ
 壁土の乾きに触れる資金ぐり
 天平の謎へ取り組む土を掘る
 土匂う記憶の中のわらべ唄
 春の土割って冬眠から芽吹く
 栄転へ妻の脂肪が少し欲し
 欲望の果ての脂の抜けた顔
 地下足袋に四季の脂が沁み透り
 女の火脂ジリジリ燃え尽きず
 ふさがっている両手へ小言とんで来る
 不甲斐ない両手をポケットに預け

一 声
 好 啓
 形 水
 醉 々
 伯 々
 東 南
 忠 美
 要 次
 弓 削
 平 素
 素 蛙
 胡 風



吉永駅で勢ぞろいした生々庵主幹
 ほかの人々(別動隊はふくまず)

萬歳の両手より句碑なお高く
 両手に花大ジョッキ中ジョッキ
 久志良
 隣から赤飯が来てあわてさせ
 赤飯を炊く日が近し試歩弾む
 赤飯へ内輪の顔が皆揃い
 杯をふせておこわの出来を賞め
 久志良
 風来子
 かよ女
 白梅子
 紅 月
 菜

★ 白寿と母

西尾 菜

私事で恐縮ながら、私には本年とって、八十七才になる母がある。

うす糊のきいてる母の小さい足袋
 昔気質の母は、九文の白足袋に、うす糊をきかしたのを、きっちり履いて、茶の間の主のようちんまりと座っている。

張り替えた障子の中に母います
 母者もこんな姿で、テレビにむかっている。何時もこんな姿で、テレビにむかっている。

炬燵の上の新聞のテレビ番組には、ところどころ赤丸のしるしを打ってある。そしてこっくりこっくりとやって時には軽い舐をたてている。

昼日中母の舐は口を開き
 かすかなる母の舐のリズム感
 帰る乗って炬燵の母と対いけり
 いくつになっても、母の傍は良い。一日の出

来事の話をして、肚のたつ話になると、相手

になりな、阿呆になつとき、と云うてくれる
 阿呆になつときなはれという母があり
 親のある倅せを六十の身におぼえ
 こんな心境だから、八十七歳の今日もおお
 って元気で、少々の縫いものは自分でやっ
 ている。

針を持つ母へ春の陽がこぼれ
 今年のおせち料理の半分は、母がこしらえた
 炬燵出て母母なりの大晦日

高野豆腐もどくこつあり母の味
 一子相伝という黒豆の出来具合

何分齡が齡だから、母の万一を考えて、妻と
 言わず語らず、これも勘定の中に入れておか
 ないと、と思う近年であつたが

ままごとの中の母にも役があり
 八人の曾孫子等のままごと遊びの中へはいり
 カレーライスを食べ、お手玉をし、プラモデ

ルを手伝う母を見て、これはひよっとすると
 百歳まで生きないかという欲がぬて来た。今ま

で、風邪ひきなはんや、そんなもの毒だっ
 せ、長生きしなはれやと、ただただ消極的な

言葉ばかりで、母にも我等にも目的がなかつ
 た。それで家族中、よってたかつて、まず本

人がその気にならなければ、その根性をうえ
 つけなければ、その執念を持たさなければと
 言うわけで、或る日ここんこと百歳まで生き
 る自信の話をした。母は、そんなに生きたら

化け者やがなと笑っているが、家族中折にふ
 れて、その信念と根性をうえつけている。
 (43ページへつづく)

川柳五十三次 (九)

富士野鞍馬

11 三島

箱根を越えて三里二十八町(二四・八キロ)伊豆の三島へ下りると、誰もほっとした。

元日は三島へおりた心もち 九竜(二六四5) 今踏んだ雲で三島の雨やどり 芋洗(二七16)

豊国の絵には、宿場女郎が化粧しているところが描かれてある。三島女郎は唄にもうたわれ

三島女郎三国一の化粧水 横好(四一31) と川柳にも詠まれている。三島の町を流れる水は今でもきれいだである。

こここの名物に、三島ノリがあった。生けもりへ霞のやうに三島のり

親のある笈摺らしい三島苔 木知(一一三23) 神子の装束べんべらの三島海苔

藤堂(一一三〇18)

三島苔は川苔で、青苔のようなもので、その包紙の真ん中が赤で、丁度親のある順礼の笈摺や、神子の装束のようであった。

提灯と曆焼芋ほど違ひ 木知(八〇21) 光陰の矢文三島と伊勢で書き

寛舎(一四八6)

これは、小田原提灯、三島曆、焼芋八里半を洒落た句であるが、この三島曆は、三島神社の社家河合氏が、応安年中(一一三六八—七四)から毎年出していた曆で、平仮名の細い字が印刷されていた。明治維新頃まで出ていたようである。

この三島神社は、伊豆の一の宮で、広重の絵にはこれが描かれてある。永承五年頃(一一〇五)能因法師は、この辺の百姓が早魃で困っているとこへ通りかかち、

あまの川苗代水にせきくだせ 天くだります神ならば神

という雨乞の歌を作り、三島明神へ奉献して祈った。その効験あって、三日の間大雨となった。川柳はこれを

和歌の徳天苗代にせき下し 佃(八一3) と詠んでいる。

このお礼に餅を搗いて、能因法師に馳走したので、それから餅のことをカチン(歌賃)というようになったと伝えられている。

下戸向の歌を能因一首よみ 山路(四四14) 雨のふらぬ前は餅とばかりいい砂(二二41) 餅の代口にとよく練って一首よみ 長物(一〇四33)

歌のちんが餅だから詩は酒だろ(三〇18) 酒で詩をつくれれば餅で歌をよみ 鮎島(四九31)

能因は右ツ手李白左ツ手 竹子(七四35) などと川柳は、唐の詩聖酒仙李太白と並べても詠んでいる。

12 沼津

三島から一里半(五・九キロ)沼津といえ ば、千本松原と芝居の平作を思い出す。豊国の沼津の絵はその平作を描いている。一九の「東海道中膝栗毛」には

この景色見ては休まにやならの坂 いたたばここにや千本の松

という狂歌が詠んである。

また広重の絵には、松林の中に城が描かれてある。その城は、三枚橋城又は観潮城といった城で、文明年中（一四六九—一八七）今川氏が築いたもので、最後には水野出羽守五万石のものであった。

沼津へ入る前に、黄瀬川と狩野川が合流する。黄瀬川は、治承四年（一一八〇）源頼朝と義経とが、初対面の場所である。

前の海は、絶景田子の浦で、富士山の眺めは第一といわれ、山辺赤人は

田子の浦にうち出て見れば白妙の

不二の高根に雪はふりつつ

と詠んでいる。川柳にも

不二山の上を漕ぎ行く田子の浦

白水（七〇六）

富士が根で差渡し見る田子の浦

里馬（二二三）

風の日はふじに網打つ田子の浦

（41ページから）

来年は米寿。次は九十九才の白寿だ。白骨の御文章の中に、誰か百年の形体を保つべきや云々と説いておられる。

御文章書きかえるほど生きてくれ

百歳になって、市長さんがお祝いに来てくれば、長寿の秘訣を訊かしたら、どないに答えはりますかと、母にたずねると

晋子（八〇23）

田子の浦船頭山の上を漕ぎ 定丸（八八21）

不二山を地引にかけける田子の浦 藤丸（五四4）

汐波の一荷になふ田子の不二 花道（五四20）

などと、富士山が海へうつる様を、いろいろに詠まれている。

山々に咲頃海もさくら鯛 金成（八〇37）

山越しにちるは沼津の桜鯛 風松（九三10）

と、ここでとれる桜鯛も句になっている。

この名勝も今はヘドロで汚れてしまった。

13 原

まだめしもなくはず沼津をうちすぎて

ひもじき原のしゆくにつきたり

と、「膝栗毛」に一九の狂歌があり、沼津から一里半（五・九キロ）の原の宿である。

海道に三宿つづく原の駅 清原（九四8）

『わたし、七宝製菓のお菓子食べてまつさか

いと答えますがな』と言うたので、とんだ

コマーシャルや、これやったら、百歳充分や

と家族中大笑いした。

たのしみは米寿白寿の母があり

因みに私は七宝製菓の代表者であります。

終

と川柳に詠まれ、次が吉原、その次が蒲原。なるほど「原」が三宿続いている。

この原から次の宿の吉原一帯にかけてを、歌枕に有名な浮島原という。

足柄の関路越えゆくしののめ

一むら霞む浮島が原

と、藤原良経は詠んでいる。

また広重は、富士山を主題にして、この

絵を描いている。

不二山も駿河はあまり舞台際

錦糸（二五二）

★

阿達義雄 著

『江戸川柳貨幣史』

定価 五百円

江戸川柳の権威、著者は新潟青陵女子短大教授、文学博士。

発行所 新津市本町四丁目一四の一〇

川柳文芸学会

▼同人移転▲

▼植村客遊子氏（京都市同人）は、郵番600

0 京都市下京区観喜寺町、国鉄APC一〇三八。

▼藤村メ女さん（西宮市同人）は、郵番662

2 西宮市若松町四の三二、夙川パークマン

ション七〇一号へ。

しに 四二番のたたり

「電話」後日ばなし

谷垣史好

五月号に書いた「電話はついたけど」が面白いから、続編を書けという編集部からの注文である。もう少しスペースがあれば、書きたい後日ばなしがあったことは事実だが、実をいうと、あの原稿を送ってから、しばらくして五木寛之の「電話について」というエッセイを毎日新聞日曜版で読んだ。この作家の魅力は、たとえ自分の妻のことを作品の中で「配偶者」と書く、それがいかにも五木らしく、また、かれの配偶者のイメージは「配偶者」と書くのがいちばん、びったりのような気がしてそんなところが女性のハートをとらえるらしく、殊に若い女の子には非常な人氣がある。

かれの家にいろいろな電話がかかってくる。百科事典に推薦の辞を書いてくれという依頼、利殖のすすめ、出版社から原稿の催促、等々雑多な電話に対する応対や、それを

軽妙にまとめた一文であった。

二月四日に電話がついて、翌五日の昼少し前、けたたましくベルが鳴った。通話第一号である。

「モシモシ、トバですか」という、女の声。それにしては人を呼び捨てにするとは、失礼な奴だな、と思いつながら

「違いますよ。こちらタニガキといえますが……」「あら、間違ったかしら、おかしいわね」女はブツブツ云い、電話は切れた。間違ひ電話であった。

午後また、「トバですか」とかかっていた。三回目は、ドスのきいた男の声で、いきなり「トバだっか」ときた。きようは、よっぽど、トバさんと縁のある日だ。

「何番へおかけですか」

「三一局の三〇四二だっしゃろ」

「そうだけ……」

「サライケのトバと違ひまんのか……」

僕はアツと思った。トバというのは屠場、つまり屠殺場のことだったのだ。ご存知の方もあると思うが、松原市の更池町に大きな屠殺場がある。終戦後、目つきのよくない兄ちゃんが自転車の後ろに包みを乗せて「やい、肉買わんけ、新しい肉やで」とよく売りにきた。「あれ、トンコツ場からチョロマカしてきたんだよ、きつ」と近所のおかみさん達は、そう云って気味悪かったものだ。

肉は好物だが、これもあろうに、屠殺場の電話と間違えられては、いい気はしない。そ

れからは連日、日に三回も四回も、ひどいのは朝の七時前にかかってくる。「やっばり、死に番号」とのたたりだよ。だから云わんこっちゃない。こんな電話、返してしまおうよ」と母は気味悪がり、ベルが鳴るたびにビクビクしている。

屠殺場に問い合わせしてみても事情が分った。三〇四二番という公衆電話が場内にあったのが、何かの都合で廃止になり、その番号が、うちに回ってきたというわけである。「主なお得意には通知を出したんですが、屠殺場の公衆電話、という性格上、不特定多数のお客相手なので、その間の事情を知らない人がいてお宅に迷惑をおかけすることになったのです。誠に申し訳ありません」と至極、丁寧な返答であった。

いきさつは明らかにしたが「トバさん」への間違い電話は、三カ月経った今も、右に一・二回はかかってくる。そのたびに、右の事情を説明して屠場の電話番号を覚えてあげるようにしている。五木寛之なら、もっと気のきいた応対をするのだろうか、これが僕に出来る。せいじっぱいの知恵である。こうして一日ずつでもPRしておれば、一年で三百六十五人。間違い電話も次第に減る計算だ。がまさに「百年河清を待つ」にひとしい。

本来ならば屠殺場が広報活動としてやるべき仕事を、こうして、うちがやってあげているのだから、そのうち、肉の一包みも持っているだきそうなのだ。期待しているのだ。が、いまだに何の音沙汰もない。

友情

不二田一三夫

今月は「友情」を西日本新聞社の「暮らしの百面相・現代の川柳」から紹介しよう。久米雄氏の句碑除幕式の記事もあり、はからずもタイムリーとなった。
筆者、小泉戸牟氏はご職業がら、どの原稿も足で書かれたものである。三太郎、雉子郎両先生の雨の夜のシーンには、ジーンとくる

ものがある。
握手した手が離れないまま坐り

浜田 久米雄

友情にも男同士、女同士、そして男女間、いろいろなあるが、この句がうたっている世界は、もちろん男同士のものである。それも親友の間柄で、何年ぶりの対面なのだろう。そのような場面にふさわしく、句の調子も内容もまことに感動的。

男の友情の世界が、ここにある。——「静中の動をはっきり知る握手」(上野十七八)
友だちのうしろの姿のありがた味

川上 三太郎
この句にはエピソードがある。三太郎氏が若いころ、川柳仲間だった吉川雉子郎(作家吉川英治氏)と雨の夜、飲んで泥酔し、道ばたに寝込んでしまった。気がついてみたら雉子郎は、三太郎氏がぬれないようにとカサをさしてしてくれた。二人はまもなく別れた。そのとき、立ち去って行く雉子郎の姿を見送っているうちに生まれたのが、この作品である。

つまずいてから本当の友一人 石川 真砂 (小泉戸牟)

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

ライバルに不覚の溜息読みとられ
おみくじに折れる弱気を鞭打たれ
茶柱の白足袋はく用思い出し
猫に肩持って隣りは折れてこず

大洲市 米 沢 暁 明

贈り物リボンをつけて女です
落し穴知っているから怖くない
柳川の春の絵巻は川下り

今治市 月 原 宵 明

落選の顔電柱で年を越し
陽炎の農夫古フィルム見てるよう
恋一つ逃がしてしても桜散る

和歌山市 秋月 宏 方

乙女にもどこか似ている桜もち
九州も近く地球も小さくなり

岐阜市 市川 鱗 魚

くたびれて来たらしデモが早くなり
倒産の余波内職の灯をゆすり
太陽が背中にあたる靴みがき

今治市 長 野 文 庫

前年の通り無難の企画室
幕切れが分らないからまだ稼ぎ
おなかまで酒が届かぬ地鎮祭

小松市 山 上 千 太 郎

青空を弱視灰色としか見えず
パンの耳は捨てるものとして孫ら
これが母性つまんで捨てる紙おむつ

冷凍

木村涼人選

冷凍の強味勝手に値が上り 十止庵
 江戸前のウソ冷凍の舌ざわり 同
 公害の海を冷凍魚が救い 千翁
 くされ縁目下冷凍期間中 同
 北海の夢を見ている冷凍魚 宵明
 冷凍の艶生い立ちを崩さない 扇水
 自家用で来て冷凍の値は聞かず 同
 天井に届く鯨の冷凍庫 初甫
 冷凍にして値の上がるまでを待ち 洋々
 今喰べてるこれも冷凍かも知れず 古方
 冷凍のえび行儀よく腰を曲げ 百水
 通の舌冷凍まぐろ見破られ 同
 冷凍が戻ったようにさめた酔い 杜月
 家計簿も月末と言う冷凍魚 緑水
 日持ちさすつもりメロンを凍ら 肖二
 冷凍魚東京行きの汽車に乗り 祥月
 冷凍魚不況の波はまだ知らず 静歩
 冷凍がこんな山奥迄届き 不二
 冷凍でよし合宿の食べ盛り 春明
 サビ効いた鮎冷凍とも知らず 春日
 冷凍の魚もうまい胃に育ち 木魚

赤道の星も仰いだ冷凍魚 白汀
 コマーシャル冷凍室も開けて見せ 悠泉
 錆ついたまま冬眠の冷凍機 一郎
 ふるさとのヘドロに泣いて冷凍魚 静歩
 ハンマーに身をまかせてる冷凍魚 英子
 冷凍魚それぞれ個性ある姿 柳子
 冷凍に背を向け虚栄の女去り 智司
 冷凍魚尻すに冷蔵庫を使い 一郎
 冷凍魚地球半分回って来 松花
 冷凍を旨く食わせる主婦の腕 利美

佳

卓球が国の冷凍溶かしかけ どんたく
 仲裁と言う冷凍の間を仕切り 千翁
 倦怠期過ぎて冷凍期にはいり 輝親
 デパートと冷凍同じ味でなし 不二
 はち切れる若さ冷凍してきた 古方
 焼き上げて活魚と競う冷凍魚 誓二
 オホーックで無念といたま凍り 宵明
 通ぶって冷凍ものを喰べている 迷朗
 ほめられて冷凍ですと言いそびれ 翁童
 包丁の冴え冷凍と思わせず 醉々

人

冷凍の鯛で結構芽出度がり 緑水
 冷凍に四季の味覚を狂わされ 利美
 冷凍魚跳ねた姿のまま凍り 洋々

純情

坂井三葉選

純情の顔を揃えて新入社 どんたく
 ゲバ棒はふれども純情失わず 恵子
 花が好きまだ純情を失わず 宵明
 純情な耳冗談と受け取らず 扇水
 純情な男であまり頼られず ろ亭
 純情をある日狂わすお酒なり 洋々
 少年の純情さにも似た魚拓 酔々
 純情な人と云われて主義に生き 暁風
 ひたむきなだけに行末案じられ 杜月
 純情の微塵も嘘の無い眸 緑水
 純情な二人にベンチ広過ぎる 松花
 純情の一途さブレイキが効かず 同
 騙されるように純情ついて行き 国彦
 純情を見込んで貰って敷かれてる 巴ツト
 純情な昔へ同期夜を徹し 迷朗
 あの頃は純情だった鏡掛け 葵水
 純情にほだされ介入やめにする ろ亭
 いつまでも妻純情で居てくれず 利美

軸

冷凍食ウーマンリブをけしかける

純情が意外な角度で転ろげだし
白江

純情な願いを込めし千羽鶴
敬一

直線で来た純情に負かされる
柳子

計算をされた純情にまどわされ
翁童

純情な妻で嘘など云い出せず
春海

白いバラだけが純情匂わせる
暁童

純情な人ねと仲居酌きこぼし
城南

純情な仮面をつくる夜の紅
止水

純情を脊中で受けた男泣き
千代香

置手紙ももう純情ですまされず
静歩

純情な娘が真白い恋をする
秋女

純情な女房で嘘が見抜けない
綾女

佳

純情な瞳が保母をとりかこみ
カズエ

純情で売り出し脱いで生き残り
伶人

純情を捨てて都会の渦に生き
古心

純情な恋がストローからこぼれ
千翁

純情な子の瞳が不潔と見るキッス
綾女

指切りで別れたことをまだ信じ
誓二

純情なだけに世相と噛み合わず
パット

人

純情な自分を騙すことも知り
木魚

地

いつまでも妻純情で居てくれず
利美

天

純情な瞳にあって嘘を悔い
暁風

軸

飯場から飯場純情失わず

ブレーキ

友淵貴山選

妻というブレーキがあり故障せず
千翁

三次会ここでブレーキかける役
季賛

ブレーキの調子も彼女も上機嫌
三十四

ブレーキをかけたい程によく喋り
七面山

ブレーキに足つかまれる新免許
百水

ブレーキの自制もきかず思慕
暁風

ブレーキを掛かすスリプと言誤算
緑水

眼の下の市街にブレーキ踏んで
新之助

ブレーキも効かぬが如し老の坂
一助

小刻みに踏んでブレーキ効くの
パット

学卒の意見へブレーキかからない
保夫

停止線冷たくブレーキきませる
迷朗

急停車不安な顔が窓のぞく
葵水

ブレーキをかける立場がネジを巻き
利美

ブレーキの故障が国会までも来る
秋月

ブレーキの要らぬ速度でもの足
白汀

高物価止めるブレーキない政治
露杖

社長に効くブレーキの住む寓居
木魚

ブレーキが過ぎて内気な子に育ち
暁明

ブレーキがきかない独身寮の酒
思月

ブレーキの点検団体バスは限
暁童

助手席がブレーキ踏んでる肩の
城南

ブレーキの裏で妥協の策を練る
静歩

仕合せはブレーキ役の友があり
誓二

ブレーキを忘れた女の赤い唇
秋女

ライバルの独走ブレーキかけ給え
肖二

青春の思想ブレーキ後手となり
双楽

佳

ブレーキがかかったように去り支度
初甫

ブレーキはおのれの心にかける
ろ亭

ありがたやわたしのブレーキ仏
古方

自分にかけるブレーキがつぶれて
凡九郎

ブレーキをかけてあげたい方が
杜月

処世術ブレーキかけたこと多く
カズエ

ブレーキの眼と心得て話題変え
敬一

人生に明日ありブレーキたしか
柳馬

ほどほどと言うブレーキ掛り上手
竹馬

ブレーキは妻が持つてる匙加減
千代香

人

ブレーキとなる齡だから道をあげ
どんたく

地

人生のブレーキせつない音を吐く
祥月

天

ブレーキの軋み両方から笑顔
宵明

軸

ブレーキを言わず格好で中古車
暁明

初歩教室

— 題「右」 —

本田 恵 二 朗

右 左 よ く 見 て 通 れ 横 断 路

秀 村

交通安全の標語を作って、川柳を作ったつもりでいては困る。川柳は、標語でも格言でもないことを銘記されたい。こうした句材をとらえたら、それを川柳にするべく努力してみなければならぬ。私なら次の如く叙すであらう。(横断路右も左も敵だらけ)だから右左よく見て、要心して渡れということになるのだ。もっとも努力されよ。

何事も右手つかって事をなす

秀 村

何の変哲もないし面白くもない。ただの説明をしただけのこと、川柳とは言えない。この説明を基にして、川柳を作れと言われるなら、私は次の句を生み出すよ。

(小器用な右手ちよいちよい借り出され)

いくら川柳らしくなったと思うが如何。

戦前は右むけ右で世を制す

志 津

戦前は「など」と説明句調でスタートするから

あとがおかしなものになってしまふのだ。その当時は思い出しての句を生みたいのなら(右向け右の政治の頃に育ち)でよからう。

物価高右へと便乗するぞさ

比呂路

ずるさという語を表に出さないと、ずるさを表現することを考えてみなければならぬ。

何もかも全部言わねば承知出来ぬという考え方は、川柳人のとるべきものではない。

蛇足を捨てて、さりりとしたものに、まとも

上げる苦心を惜しんでほならない。

(またしても右へならえと値上げする)

この一句を読んで、全くずるい奴らだと感じ取ってもらえよいわけである。

相がさへ右肩少しぬれて佇ち

文 子

説明調とはこの句のことである。相傘などを句材にした場合は、ちよつぴりとお色気があってしかるべし。ただ佇ちたのではだめ。

(相傘の右肩うれしそうに濡れ)

右の通り相違無しと印を押し

シ ゲ

ちつとも面白くない。座五の印を押しが句を殺してしまつたよ。座五を変えることによつて、面白くなってくる。たとえば次の如く

(右の通り相違無之また借金)

(右の通り相違無之また借金)

誘われて曲れ右した縄のれん

慶 彦

誘われて曲れ右した縄のれん

せぬと失敗するよ。

(縄のれんが廻れ右と声をかけ)

コックさん流石に右手は器用です 八 郎
(コックさんの右手年季のほどを見せ)

座右の銘今朝はハツと胸を打つ 誓 二
(座右の銘ハツと見直す今朝の悔い)

右腕といわれ社長とともにおり 近 江
(右腕といわれ社長ともいわれ)

座五が説明に終つて、失敗した句だ。

(右腕といわれ社長の鞆持ち)

(右腕といわれ鞆持ちともいわれ)

前後左右忘れて花畑に立ちつくし 翁 童
(花畑前後左右を忘れさせ)

右の手にバッグをかえる暗い道 新之助
(暗い道バッグ右手に持ち換える)

右差してもうこつちのもんだが投げ出され まさひろ

くどくどと、長々と、説明をしたものだが

これは句材をメモしたもので、さてこれから

句にまとめなければならぬまい。それが作句の

楽しさである。そして苦しさでもあらう。

(お得意の右を差したがもろに負け)

右見せる顔の左が気にかかり

止 水

もつと味のある句にしたいよ。私なら

(お見合で右顔ばかり見て戻り)と叙すよ。

すると、左が気にかかるなど言わなくてすむ

右左素直に見せるガイド佳し

迷 朗

(右左ガイドの美声にあやつられ)

右腕が産業スパイと露知らず

富 士

(右腕が産業スパイであったとは)

右に折れ左に曲る露路があり

隼 人

があり—で終ってはなんの味もない。

(右に折れ左に曲る露路住い)

盲腸は右と素人決めており

(素人診断右なら盲腸だろと言う)

自由です右も左もみな自由

(世の移り右も左も自由過ぎ)

右手から見れば左手なまけもの

右左夫婦別れをさす番台

面白いぞ。川柳らしき川柳だよ。

右の手も便利に使う左利き

右折禁止二号の家が遠くなり

右派と左派同じ意見は棚に置き

左にはつけず右にもよりきれず

清水

久子

利美

同

花子

杜月

克枝

露杖

右腕でうてと怪我を見舞われる
病み耐えし右半身に悔いはなし
ごきげんの時は右肩あがる癖

号合の右向け右に思うこと

右側を行けば心ブツつき当り

一国の縮図わが家も右派と左派

右腕をものがれて社長の鉢にぶる

右手のしくじり左で頭かき

右左器用に使えて貯めていず

左手は補欠になれず右不随

右側を歩くと孫がたしなめる

右総代の孫へ拍手をしてあわて

真心が右により過ぎ怖がられ

春海

藤持

亜矢子

カズエ

保夫

竹馬

双葉

生仏

軒太楼

静子

贊平

三十四

繁子

雅号ぶつちやげばなし

(83)

せいじよ



小笠原 青女

おがさはら

あれは、ちようど主人と二人で、汐風先生から二人の名が悪い故、改名してはと、親切なお便りを戴き、御伺いしてお聞きしますと、姓名学から見ると大凶の名前とか、そこで名付をお願いし「青女」とつけて戴きました。何でも女らしく、しとやかで純粹、すがすがしい名だそうです。本人に取って面映ゆい限り、でも私は「青」の中に己の未熟さ至らなさを表わしているつもりです。時東十余年、今だに良い句も出来ませず、お恥しい事です。昨年に入院、手術と命拾いをしましたが、今年こそ青女を生きたいと蘇らせたいと思います。

今年こそ今年こそはと御正月

雄堂(齒科医)の妻(四十七歳)

右向いて左を向けば財布瘦せ
右に妻左に子供平和です

子は左親父ますます右になり

内裏さまことしも左右まちがえる

味噌汁の上手な妻を右に置き

右左平均がとれていて平和

政党に右と左があつてよし

明治の意見右に寄り過ぎうとまれる 肖二

句会などで没になる句は、類想句が多い場合と、句材はとらえているが、表現がまずいのが、主として没になる。説明句は、絶対に没になると思えば間違いない。

類想句とは、誰れでも作れる句であつて、つまりちんぷな句と言うことである。表現のまずさは、練りの足らぬ証拠だ。十分に練り直せば、ものになる。説明句は、故路郎師の言われている「そうですか川柳」のことである。自分の句を読んでみて、その終りに「そうですか」と付けてみるとよい。それでおしまひだつたら、自分で没にするか、練り直してみなければなるまい。以上は作句するものの基本的条件である。さあ頑張ろうよ!

題一上—六月二十日締切 (八月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井三五二(☎七一一)

本 田 恵 二 朗

大萬川柳

「朝食」

入選発表

選者 川村好郎

投句総数 六百六十句
入選 五十四句

今朝だけは赤飯の味初出勤

広島 鬼焼

朝食がこんなにうまい回復期

倉敷 里風

和解した朝の茶漬のリズミカル

鳥取 佳女

朝食のパンが明治の氣に入らず

倉敷 翁童

朝食も喉に通らぬ受験の日

尼崎 利美

冷戦中朝は喰わぬ喰わさぬ氣

倉敷 惠二朗

てんやわんや送るポツンと朝の膳

高槻 静馬

朝食も食わずにクジに列ぶ欲

大阪 誓二

夜勤明け妻あたたかく盛りつける

米子 瑞枝

病院の朝食孤独な夢に覚め

大阪 形水

下関 木石

妻じわじわ昨夜へふれる朝の膳

神戸 牧人

食卓へ今朝も家族は恙なし

大阪 保夫

朝食へ内職の妻寝かしとき

大阪 比呂路

朝抜きの駄足忘れものばかり

米子 千代

湯気白くキャンブに朝がたちこめ

大阪 柳志

朝を出る順にみそ汁ぬるくなり

貝塚 つき子

辞表破り捨てて朝の膳につく

富田 花梢

朝食の夫の無口にさからわず

倉敷 千翁

朝食とニュースをたたみ込める

西宮 百酒

朝食にまた酒を呼ぶ旅の雨

藤井寺 百水

何食べてたどりついたか出勤簿

八尾 一治

朝食に茶柱今日の期待かけ

堺 真沙子

朝食の箸が止った株式欄

東大阪 綾女

大阪 小松園

朝食の箸置く順に靴を履き

八尾 鬼遊

朝食の汁に昨夜のネギが浮き

大阪 文秋

華麗なる宴の名残りの朝の膳

順番に時差出勤の朝を食べ

朝食を抜いてもドライヤーはかけ

東大阪 弥生

朝食へ女の素顔見せられる

早出する朝飯会話なきままに

倉敷 筒子

秒針が追う朝食が熱すぎて

瘦せたくて寝たくて朝食抜きに

倉敷 扇水

朝食だ不吉な夢は話すまい

汐待ちを朝食にする船世帯

佳句

大阪 金三

氣持よく出してあげたい朝の膳

大阪 文秋

朝食までをセパードに引きづられ

貝塚 つき子

母の味かみしめている嫁ぐ朝

東大阪 生長

朝めし前と高をくくっていた誤算

大阪 柳志

泣いた寝た子がお替りをしてる朝

東京 次章

人ノ句

笠岡忠三

仏様朝食だけを授けられ

地ノ句

堺 一二三

藤膳の夫と語る朝の箸

天ノ句

大阪 水客

赤飯の残りて朝のい話題

選者吟

朝食も駅弁幹事も疲れ切り

寸評

一、「朝食」は作句に取っ付き易く、句想の範囲もせまいので類想が多く、寝過ぎて朝食を抜か

柳縁

有信新之助

若い頃、柳誌「番傘」、俳誌「同人」ほか「文案」や「上方落語」など、定期刊行物や日刊紙を扱う印刷所にいた。

どういふ縁か、川柳塔本社の近くで、仲之町三四番地だったか？に、中村盛文堂というのがあっ

すという句が二七〇句もあり。二目酔と朝食、共稼ぎと朝食が多かった。一、没句と抜けた句を比較してほしい。

昭和四十六年度

ベストテン (五月現在)

- 一 花梢 一三〇 富田杯
- 二 文秋 一一五 大阪
- 三 木石 九五 下関
- 四 扇水 九〇 倉敷
- 五 水客 九〇 大阪
- 六 真沙子 八五 堺
- 七 みのり 八五 愛媛

た。そこで小僧として勤めていたので、本誌の編集から、発送までの苦勞がよくわかるような気がする。

当時の「番傘」を編集していたのが市川御舟氏だったとおもうが、校正を届けに行くやいきなり怒鳴られたことがある。

何が原因で怒られたのか、いまだにその原因が判らないが、多分わたしの態度が生意気だったのであろう。ちよūd十八歳ごろのことである。

その後、呉海軍工廠へ徵用、兵

八里風

八〇 倉敷

二三 一三夫

五〇 大阪

九千代

八〇 米子

二四 鬼遊

五〇 八尾

十一 つき子

八〇 貝塚

以下略

昭和四十六年度第七回

十二 天笑

七〇 神戸

「ショック」 五句以内

締切 六月二十日

十三 どんたく

七〇 堺

第八回

「片思い」 五句以内

十四 圭井堂

七〇 堺

締切 七月二十日

投句先

十五 惠二期

六〇 高槻

大阪市南区饅谷仲之町二〇

郵便番号 五四二

十六 静馬

六〇 東大阪

川柳塔社

大萬川柳係

十七 弥生

五五 藤井寺

をみたいと思っっている。

（二三夫追記）故梅志さんが、句集を出す決心をしたのは新之助さんの書信からだったそうである。よく梅志さんから新之助さんの誠実さなどを聞かされたものである。世話好きでもあるし、句会部の幹事にもってこいの人で、毎月の本社句会では最後まで片づけものなどで残っているのが新之助さんである。旅行にしても柳友の写真をいっいち郵送するあたりよい人柄がしのばれる。）

十八 吸江

五五 大阪

中村盛文堂の小僧時代、俳句「同人」の編集をしておられた。宗田千燈という方の人柄にひそかに惹かれていた。

川柳塔の同人の末席に加えていただき、千燈さんの語呂をそのまま、川柳塔の塔を一字いただいて「千塔」という柳号を用意しているが、折があったら本社のご了解

十九 代世

五〇 倉敷

投句先

大阪市南区饅谷仲之町二〇

二十 筒子

五〇 倉敷

郵便番号

五四二

二一 瑞枝

五〇 米子

川柳塔社

大萬川柳係

二二 恒子

五〇 大阪

をみたいと思っっている。

（二三夫追記）故梅志さんが、句集を出す決心をしたのは新之助さんの書信からだったそうである。よく梅志さんから新之助さんの誠実さなどを聞かされたものである。世話好きでもあるし、句会部の幹事にもってこいの人で、毎月の本社句会では最後まで片づけものなどで残っているのが新之助さんである。旅行にしても柳友の写真をいっいち郵送するあたりよい人柄がしのばれる。）

☆柳 界 展 望☆



浜田久米雄句碑除幕式の盛会ぶり

(橋高薫風担当)

▼中島生々庵主幹は心齋橋ロータリークラブの会長として活躍されているが、五月十五日新大阪ホテルで国際ロータリー加盟証状伝達式に主役として出席、大任をはたされた。

▼一九七〇年度第三回周魚賞作品が発表になった。

▼第一席 助かった金は夫婦で返しに來 高木九史

▼第二席 孝行と知らぬ孝行美しい 小谷源氏

▼第三席 たとえばの中に本心言つて見る 大面力也

▼川柳「路」第一回誌上川

柳大会応募要項

風刺吟 石原青竜刀選

自由吟 時実 新子選

(課題)

一本勝負 小谷 源氏選

拂 群 佐藤 正敏選

膝 勝 祐沼 考人選

輝 く 新井栄太郎選

結 ぶ 関 水華選

各題三句、縦十八糎、横三種の句箋に、表に句を、裏に風刺・自由・課題別を明記、無記名にて小田原市鴨宮三七二の二関水華方川柳路吟社宛、出句料二百円、締切り六月三十日。

▼せんば八月十二日合併号は村田小太郎追悼号

▼中島紫痴郎翁句碑建立五周年記念大会は四月二十五日(日)午前九時から長野県南魚沼郡大和町龍谷寺で第四回奈加川・柳宴合同納涼かた会は七月十八日(日)正午から名古屋市恵方町電停東三百米のかがが荘別館大広間で開催。兼題||あわて者・岩風呂・裸・恋人。連絡は名古屋市中川区東出町二の八丹羽麦舟宛

▼堺若芽、和歌山、富柳会合同吟行句会は四月十八日雑賀崎の魚叉楼で開催。

▼渡辺蓮夫氏(東京都府中市)は川柳研究四月号の編集を最後に編集長を辞任。

▼愛知川柳作家協会第七回総会ならびに川柳大会は、五月十六日(日)午前十時から熱田新開堂大影閣で開催。

▼京都新聞柳壇大会は予定を一カ月繰りのべ、五月三十日(日)午後一時から京都新聞社大会議室で開催。

▼「ささやま」二百号記念句会は三月十四日六十余人の出席者を得て開催、主宰の小西無鬼氏は、会員八十名、参与二十名の句集出版力を尽された。

▼川柳かがみ句会(岡山県)

は六月二日夜池田古心居で。兼題||水不足・話し合。ホタル・裸。七月句会は二日正午から。兼題||星・歯車・ちくはく・制限。

▼川柳備前五月号は備前川柳社二十五周年・浜田久米雄句碑除幕記念・吉永町文化川柳大会特集号発行。

▼菜の花句会(八尾市)は四月十三日の第三回例会からユーモア賞を新設、板尾凡吉氏(富田林市)が菜の花カップ賞と共に独占獲得大いに気を吐かれた。

▼正本良子さん(大阪府)と久米奈良子さん(大阪府)の句が、川柳塔誌の中から選ばれて、四月十七日の朝日新聞夕刊の「川柳と俳句の相違縮む」と題する欄に掲載された。名を知らぬ古寺のいらかにある温み||水客。||新春の机ひとりのものとして||奈良子

▼渡辺暁童氏(愛媛県)は五月四日令嬢の夫君が南極から「ふじ」で帰国されるのを晴見埠頭へ出迎えられる五日は歌舞伎座で菊五郎追善興行を見物された。

▼東野大八氏(美濃加茂市)は五月六日夫人同伴で鳥羽へ。他に親戚の四組のご夫婦も同行されたが、氏が一

▼吉村翔我追悼句会日時||6月13日午後一時。場所||尼崎市立労働福祉会館三階(阪神電車尼崎駅下車北へ二百米右側)

兼題||切手・秀果選||噴水・言也選||灯・小松園選||曆の三碧選||翔ぶ・塊人選||ちのち・宣介選。他に席題三題。会費二百円。追悼句会お願い。大阪府阿倍野区北富三||一九・せんば川柳社。

番若く世話人格となつて大女にて真珠とあれば殊の外||の句信を頂戴した。

▼高野不二氏(新潟県)は四月一日付で県教育庁下越教育事務所佐渡出張所勤務となられた。六年間の両津高校在職時代の思い出に、第五句集「あしあと」を発刊された||はめられた時は送別会だった||云いまけてからも味方をまだ集めて

▼水粉千翁氏(倉敷市)の令嬢美紀(みと)さんは五月三十日戸島神社の神前で矢野徹市氏と華燭の典を挙げられた。媒妁は川端重雄・柳子ご夫妻。また、美紀さんの令妹美爽(みさわ)さんも四月四日倉敷国際ホ

テルで中塚利夫氏とめでたく結婚の式を挙げられた。お慶び申し上げる。

▼川端柳子さん(岡山市同人)の令妹二宮照子さんは四月十八日逸見灯竿氏(岡山市)の媒妁により、クラレ総合結婚式場白鷺で華燭の典を挙げられた。夫君は田辺製菓試験第三部長松原毅氏。水粉千翁氏、小幡原風氏の祝電が披露され、新婦の友人として出席されていた傍島阪大名誉教授の令嬢保子さん、傍島静馬氏の姪御さんであったりして川柳に縁の深い式であった。薫風が培席した。

▼逸見灯竿氏(岡山市)は前記の媒妁のほか、三月、四月にかけて結婚式に列席されること七回であったと。(結婚式)一滴の酒一生をあたためる 灯竿。
▼水谷竹荘氏(大阪市)は川柳高知の句評を四月号から担当された。
▼山田季賛氏(高槻同人)

新同人紹介

齊藤

三みと
十と
四し
春巢・弘生推薦

は四月十七日、十八日の両日、米子皆生温泉、出雲大社参拜の旅をたのしまれた。

▼有信新之助氏(大阪市同人)は五月一日から新潟の小千谷・十日町を経て日光へ。そして、水戸偕楽園、犬吠岬から海軍時代に過した館山の練習航空隊跡を訪ねられたが面影すてにね、全行程一九六三軒を愛車で走破、五日朝帰阪された。「灯台も待っているのに暮れしふり」

▼菊沢小松園氏(大阪市)は竹原川柳会の「作句教室」を担当されることになったが、復活第一回の題句。「復活」は、森井晋居氏の

リダーを得て復活の血がたぎり
▼小島蘭幸氏(竹原同人)はこの度、郵政事務事官に昇進された。
▼森井晋居氏(竹原同人)は郵便創業百年記念に開かれた竹原郵便局での切手展

に「花と川柳」のテーマで出展、夫人の森井そのみさんと共に好評を得られた。

▼垂井葵水氏(和歌山市同人)は、五月十九日川柳やかま吟社の例会を新宿で開催、紀南の柳人諸氏と交歓された。

▼丸山孔一氏(西宮市)はこの度、東京銀行ロサンゼルス支店勤務となり五月下旬赴任された。

▼三浦涼秋著、句集「凡教師」が二月二十日新潟県新津市本町一柳都川柳社から発行になった。二十数年間の身辺句千四百二十三年間集録されているが、その序で大野風柳氏は言う「凡にして凡にあらず、この教師の風貌から、ことばから、あるいは吐き出す息の中から、庶民の実感を、子どもたちは感じたに違いない」と。

「柳都」発刊以来二十三年に亘り一人柄がよく出てまぬ著者の人柄がよく出ている。勿論職業柄、首席の子短所はずぐに涙くみ
子をかみ静かに焦る
凡教師
卒業歌
校庭の風透きとおり

など、生徒との情感を詠んだ佳句が多いが、元日は二日の違い言わず酌み

といった一般的な秀句も散見する。B列6号、定価・送料共七百円。

▼桑野林鶴氏(倉敷市)のはからいで、戸島公園が誕生。川柳を書きこまれた腰掛けで佳句をぬり出せようと、川柳家に好評だとか。

▼下村梵著「武玉川」第六集七頁下段「鐘の音計黒き雨乙」と訂正。雨やどりは誤記。

▼阿達義雄著「江戸川柳貨幣史」定価五百円が新津市本町四丁目一四、川柳文芸会から発行された。
▼北日本川柳大会が六月六日正午から北日本新聞社講堂で開催。題「少年冬青連ほか・受付・晴天・砂・裏夕刊。会費一五〇円。
▼第十六回近県川柳大会は六月十三日一時から石川県美川町社会福祉センターで開催。「住宅・茶仏選」

八木摩太郎氏(堺市同人)の「公書を吐けとは仁徳のたまわす」の句を使用。

▼川柳ジャーナル五月号に「今日の川柳における「笑」の問題」石原青竜刀氏が「やれやれと安心している棺の中」須崎豆秋「お月さま残念ながら敗けました」同「軒下で川舎銀座」のパスをよけ「小西雄太」

「天皇のレジャーはカニとたわむれる」不二田「三夫」本社同人ほかの作品を紹介されている。

▼樋高薫風は四月三十日から、窪田道男・久美子夫妻と同道、富士五湖めぐり、伊豆大島を巡遊。「三原山城攻め落とす気で登り」

▼堺・若芽合同川柳会。六月十三日午後六時から。兼月十三日午後六時から。兼木摩太郎居。堺市農協出題。「農繁期」八木摩太郎宛。
▼南海川柳会。六月十七日午後六時から。題「出発。表彰。口呆。親和クラブ」

▼南大阪川柳会。六月十九日(土)午後六時から。題「骨・自由・望み・やり玉」

松崎町二丁目自和貴荘。

川柳家の暦

(六月生まれの人)

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年前この取材に走りまわった力作である。十二月分までノートに書かれてあるので順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表作という意味ではない。
(編集部)

遺稿 清水白柳

1日	松本波郎 M39 丙午	敷居から敷居へ急ぐ拭掃除	青年の主張へ頼母しく負ける	8日	花東千久良 M27 甲子	平凡を好しとは強いことが云え	名古屋
2日	中村東角 M43 庚戌	空気銃呼吸吸めれば鼓動する	8日	玉井彩泡 M38 乙巳	さげられる姿となった狐の尾	高知	
2日	飯家和美 S8 癸酉	天国のパパにも翼あるかしら	8日	大坪三鬼 T8 己未	貧乏が美しすぎる綴方	高知	
5日	東野大八 T3 甲寅	瓢箪の艶が撫でろというような	8日	藤田夢迎 T15 丙寅	喜びへ隣り同士があらたまり	高知	
5日	岡村海鳥 T14 乙丑	風邪ひくな風邪を引かすな母の文	9日	松丘町二 M35 壬寅	飛田飄軽坊 M37 甲辰	大坂	
6日	西辻竹青 M36 癸卯	自重論妻は遊んで居れと云う	9日	木村千容 M20 丁亥	酔い醒めの水いささかの悔があり	群馬	
6日	大坂形水 M41 戊申	冷房がないからやめるお手伝い	10日	小林古鹿 M26 癸巳	捨てるには惜しい茶器なり合せてみ	倉敷	
6日	本城快哉 T11 壬戌	書けばいいものをゴム印さがすなり	10日	丸川初甫 M41 戊甲	灯台の夕陽神話を抱きよせる	中村	
7日	山村祐 M44 辛亥	奥津啓一朗 T3 甲寅	11日	森下冬青 M37 甲辰	旅費だけで済まぬ故郷へ遠ざかり	芦屋	
7日	余頃紅児 S2 丁卯	いい抜けるすべもあるのに妻は詫び	12日	江原たつ路 T3 甲寅	13日	花東千久良 M27 甲子	名古屋
8日	畑多聞子 S7 壬申	長男という宿命が遊ばさず	13日	江原たつ路 T3 甲寅	14日	大西八歩 M40 丁未	鳥取
					14日	阪上十止庵 T4 乙卯	大坂
					15日	清水美江 M27 甲午	浦和
					15日	若本多久志 M35 壬寅	西宮
					15日	西川誓二 M43 庚戌	大坂
					15日	樋口舟遊 T13 甲子	西宮
					16日	中西祥典 T6 丁巳	静岡
					16日	楠美佐雄 T12 癸亥	竹原
					17日	城一舟 T3 甲寅	堺
					18日	福原南々子 M25 壬辰	東京
					18日	中野柳陽 M29 丙申	立川
					18日	松川青影子 M37 甲辰	大阪
					18日	亀井勝二郎 M40 丁未	堺
					19日	大久保大夢子 M23 庚寅	姫路
					20日	榎田竹林 M31 戊戌	静岡
					20日	秋月宏方 M32 己亥	和歌山

日本人の知恵のはしくれ竹とんぼ

23日 野村圭佑 M42 己酉 東京

どう感じようとも石が置いてある

25日 福井野迷路 M25 壬辰 大阪

幕切れに涙のままで手をたたく

26日 野村味平 M38 乙巳 加賀

傷ついた疲れ尊いものにする

26日 根上柳村 M39 丙午 伊東

味噌汁と目刺し平和を抱きしめる

26日 中川晃男 T4 乙卯 松江

教会の鐘が心の傷を打つ

27日 福田丁路 M38 乙巳 高槻

パンクして呑気な人に取りまかれ

28日 本庄金三 M41 戊申 大阪

陳情とデモすれ違う淀屋橋

29日 松浦蝶古 M40 丁未 福岡

30日 養田浄美 S25 庚寅 竹原

陽の中で咲いても見たい水中花

大阪の句に思う

阪上十止庵

思えば遠い四十年もの昔、昭和も初期のころであった。川柳雑誌社が、大阪の名所、名物を、毎月の句会の兼題としてとりあげ、発表されていたことがあった。大阪の川柳風土記を遺したいという、路郎主幹の御意図からであった。

そのころ、この道に、ひと足ふみ入れたばかりの私は、句会のために出題される、千日前、新世界、文楽、栗おこし等々、大阪ゆかりの身近かなテーマが、何故かまとまらず、苦吟の連続であった。

若い私は、このような古い、固定化した具象を藉りて詩情を吐露するに足らず、あまりにも多感な青年でありすぎるといふ自負心があり、きまりきった事物を句にする古めかしさにあきたらなかつた。若い夢と情熱をふん

だんに盛り込んだ、新しい時代の波にもまれながら、その折ふしの感情を新しい十七文字にまとめることに、自画自讃の毎日であった

憶えば、それは精神を忘れた、単なる文字の遊びにすぎなかつた。最新流行の衣服を誇らし気に身に纏いながら、中味は古臭ふんぶんの亡骸であり、猿芝居を見る哀れさを気づかぬ、人生の青二才であり、川柳の新米であつた。

いかに、素材が古めかしく、固定化されたものであろうと、それを現代に活かし、躍動させるのが、処世の力であり、文芸の力であることと知らなかつたのである。

もつと、人生を見極める努力をして、そのさまさまの思いを川柳に託すべきであつたといまにして、おろかしくも悔いる。あれから今日まで、おそらく私は、万を超える句を削つたであろう。が、未だに、自分の句が一句もないことに、胸の痛む思いがする。

そんな私を、憐れみ、嗤い、慰めるように生々しく呼びかけてくる、あの頃の名作が、四十年の歳月を超越してなお、日に新たに、私を鞭うつのだ。あの先輩が、あの友が……お前の句は、いつたいどこにあるのかと。

はこずしはよんべの色の新世界 かほる
新しい通天閣ができて、この街は、一見近代化されたかにおもえるが、よんべの色にかもし出される、そこはかとなない哀感はいまもなお脈うっている。老いの身の感傷というなかれ、いまこの句の解る若人は何人あろうか。

高橋かほるさんは、異色の作家として数々の名吟を遺されている。いつの句会でも、渋い和服の着こなして、もの静かに正座され、句想をねっておられた姿を昨日のことのように思い出す。すでに故人になられたとか。惜しまれてならない。

苦節十年栗おこしだけ掲げてくる 友 帆
十年もの苦闘の汗の成果が、片手で軽く掲げられる栗おこしの包みだけだつたとは。人生のきびしさ、むなしさがこみ上げる。が、これでも幸せ。土産どころか、帰らぬ人もい

清水友帆さんは、故白柳氏の令弟であり、私の無二の柳友であつた。ともに、あつちこつちの支部の句会にまで出席した昔がなつかしい。令兄とはまた異つた作風で、洋々たる前途があつたものを。天は無情、凡愚の私

が、天折の彼を思ふ身にならうとは。

大阪をはなれる音の長柄橋

満潮

唯物都市の一隅で見つけたこの詩情。いまは副都心としての賑わいに明け昏れているこの辺りも、さて、橋畔に立って見れば、淀の流れにへだてられた、遙か対岸のたたずまいに、遠い思いがよみがえる。

魚住満潮さんは、友帆氏らと一緒に、作句にいいそしみ、柳談を交わした、なつかしい柳友である。御健在との風聞に接してはいるがこの上の御健吟と御自愛を祈るや切である。思いつけばこのほかにも、あの句この句と際限もなく、当時の名吟が氾んでくるが、何かしら、としよりのくり言めいた侘びしさがこみ上げてくる。それはそれとしよう。

しかし、前記の三句は、久しく川柳を忘れていた私をよびまわしてくれた。今後は、おそまきながら、この句境を目ざして励み、自分の一句を遺したいと念願している。いのちのある句の偉大さ、それを、今にして知り得たことを悦びつつ……名吟を無断で引用したことをお詫びする。

文楽へ老後の閑を泣きに行く

十止庵

討論・評論やい

神谷凡九郎

私は川柳は裸(人間の裸かナ、裸の人間かナ、いややっぱり裸そのもの)であり、そこ

には何時も人間臭み一杯の人間がピツたりと離れぬものかとばかりクツキ立ちほだかつていて、単なる漫画であつたり、夢であつたり、といつても未摘花的(これはあまりにも嫌な人間臭みを持ちすぎる)であつたりはしない。生きるものとしての人間の心と、その具象的なもの—おそらく時代をさえこえた、生きとし生くるものとしての—が、訴えるものでありたい。人が、物が、背景が眼に見えそれが唯たんに写つたもの、そしてそれを底深く見つめようとせず皮相的にとらえるものではないと思う。云うなれば二日も三日も過ぎてボンと膝を打つ落語のようなもの—笑いでもなく、人間の心を底からゆするもの—そんなものであつてほしい。そして、人間にかプラス(逆説的な意味も含めて)するようなものであつてほしい。

然し、現実単なる観念句であつたり、交つてるナといわれるような句—当然、深みも示唆すらない—しか出来ない自分の現状。それを、その壁—自分だけの独りよがりでありそれが僕の地そのものかも知れない—を打ち破つて見たいそんな日々なのである。

一面『多作多読』と言われる言葉が分つて分らない。『百読意おのずから通ず』と云う言葉も知つてゐるし、自分の子にも云う事がある。しかし、所謂川柳誌に川柳に対する評論、私論、討論が余りにも少ないように思う。いや、まったくないので—これで初心者は勿論、川柳らしきものがやつとわかつたつもの者(僕もその一人)が川柳を遠いも

のよう思い初め、遂には五里霧中の内に歩け歩けにまけて川柳そのものから離れて行くのでなからうか。

種があり、蒔かれる土があり、そこに育てるべき人の愛情があつても、そこに太陽が輝き、雨が降り、肥料がないならば、まして育てる術を教える人がないならば、『何が育つか』川柳の雑誌は他人の愛し育てた鉢植を飾り立てた花壇—それ自身にも充分意味はあるが—見物であつてそれだけでよいのだろうか。ただただ多作、多読と云い、『百読意おのずから通ず』の柳誌ではなく

どう作るか

どう読むか

どう育てるか

あなたの疑問は、実は……に、ヒントを与えたり、答えたり、反駁したり、考えたり、共讀したりする親しみ深い川柳誌であつてほしいし、その方向へ進むものであつてほしいと思う僕である。初級、中級、先生の間隙をうめ、世代的な断絶をなくす道でなからうかと思う僕である。その意味でも僕の意見にも何等かの御指示を賜りたいと思う。『云いしたい事云つてラ』何処かのTV番組でそんな言葉を用いてゐるうちに、いつかこんな文章を書き出した僕である。

ただ読み作つてゐるだけで、それが何かを少しも知らない—勿論僕の云う川柳とはの方面から見ても—僕がまったく恥かしい。

本当はこれが此の文章を僕に書かされた、僕の本音かも知れない。

本社五月句会

会場 以和貴荘
七日 午後六時

毎年五月のゴールデンウィークは、句会にとつては泣きツツラ週間で、この日も六十名を割ってしまつた。在阪柳人のご協力がほしいものである。

句会を軽視する人もいるがトンでもない、句会こそ句壇錬磨の場であることを銘記していただきたい。

本月の柳話は好郎氏である。四月二十五日の久米雄句碑除幕の日の模様を、このあと映写される8ミリとうまくつないで好調。

建碑記念川柳大会にあわせて備前川柳社二十五周年記念というおめでたが重なる。川柳王国岡山の人情など好郎氏の話はつづくが、時間の制限もあり天笑氏の演出、撮影、解説によるその日の絵巻きをカラーで紹介され、明るい笑い声が場内にあふれる。

月間賞杯は城一舟氏。本年二度目の快挙である。

(河井庸佑整理)
出席―瓢太・双楽・古方・一舟・花梢・静馬・圭井堂・柳志・好一・徹舟・緑水・三十四・木蔭棒・敏・葛城・一三夫・天笑・好郎・柳宏子・水京・六童子・千万子・肖二・綾

女・酔升・静歩・美代・雪二・勝晴・凡吉・万的・儀一・文秋・形水・一治・維久子・いさむ・茂美・凡九郎・鶴声・葵水・季賛・鬼遊・夢成・生々庵・一二三・金三・新之助・吸江・小松園・弥生・多久志・酔々・虎声・与呂志・庸佑・あいき・葉子。

席題「スマート」 福浦 勝晴選

スマートを意識して、女子ボーラー
スマートなかつこうだけのゴルフ
スマートで無いがと妻の打ちけいし
スマートな男へ妻舌打ちし
スマートな洒落であつさりあしらふ
ワキ役の抵抗スマートに死んで見せ
脚線美ホットパンツが気に入らず
砂丘に長くスマートな影君と僕
スマートな背広で思想の色がない
スマートなハズが帰らぬ午前二時
財布スマートになって運休も仕舞い
スマートに改装してからひまになり
スマートな話術で愛を拒まれる
スマートにまるとタレント本を売り
若い時はスマートだったと言つて、
スマートになつた噂の別居中
スマートに着こなし空手高段者
望みどおりスマートにして、病んで
スマートなモデルとしての真剣さ
スマートな刑事に手錠かけられる
スマートに成り度い努力腰のため
スマートなマダムはテレビドラマで

与呂志 酔升 儀一 緑水 万的 柳志 水京 あいき 万代 儀一 六童子 好郎 葵水 鶴声 三十四 小松園 葵水 一三夫 文秋 圭井堂 綾 肖二

席題「空巢」 城 一舟選

スマートに石段下りるにもリズム
スマートな嫁を選んど産に泣く
スマートになつたとはめる見舞客
スマートに見せて歩いて肩が凝り
スマートな恋は冷たい色で燃え
スマートはあきらめたらし朝を食へ
スマートに撮つてくよと無理を言い
胎動を支えるスマートな妻の息
スマートなイモと南京売れ残り

正直に吐いて空巢よく眠り
どん底に空巢見向きもしてくれず
空巢から抗議出そうな被害額
空巢から団地はものを言いはじめ
新顔のセールス空巢とまちがわれ
同じ手で空巢に三度までやられ
ある無いを見抜く空巢の悪い勘
火事よりはましと空巢の負けおしみ
ポケットに明日のプランがある空巢
スキだらけだからやつたと空巢の理
新米の空巢あき家へ忍び込み
鍵かす穴も空巢におぼえられ
空巢からさんざん戸締り教えられ
なさそうで有る家空巢よく調べ
一匹の小犬が空巢寄せつけず
空巢にも年入つたのはどこか違い
錠前をせせら嗤うて居る空巢
空巢に遣入られてからベルを付け
新米の空巢鼠におどかさされ
花だより空巢もボチボチ腰を上げ

弥生 千万子 本蔭棒 酔升 いさむ あいき 酔升 勝晴 六童子 凡吉 葵水 静馬 好郎 酔々 双楽 静歩 柳志 天笑 静歩 庸佑 醉升 水京 六童子 綾 肖二 柳志 吸江

人格の悪さ空巢に間違われ
気にしてよ空巢に入られた
堂々の空巢留守居と間違われ
へそくりも空巢の勘に見つけられ
空巢から笑われそんな鍵をかけ
空巢やと届ける前に子を調べ

席題「真夜中」 神谷凡九郎選

真夜中の雨に遠足消えていた
真夜中の銅像月へ動きそう
真夜中のうごめく音を聞く都心
夜汽車の夜へ父の帽子がゆれていき
真夜中が書入れ時の職に生息
真夜中の靴音俺の音でなし
真夜中は人の寝息も魔に聞こえ
午前二時哀れ道頓堀の灯が眠い
夜のしじまそんな情緒も消えた街
真夜中の水はひとりで飲みを下り
真夜中にたいアンヨがとんでくる
真夜中の議會政治にある不安
月中天森は無気味な影造る
真夜中を何に走るか救急車
コインロッカー真夜中の風を入れ
真夜中の思策紫煙まっすぐに
真夜中の車の方が人を選び
真夜中に煙草がほしいので困り
真夜中に声を鍛える滝に立ち
真夜中に起きたら起きてしまふ癖
車庫に入る終バス星にねぎらわれ
深夜劇終えた頃から猫が啼き

無神経やろから真夜中に乗りつける
一言の余韻真夜中ぬくめてる
生活へ夜底をバタヤの轍音
真夜中でもいさ散歩を思いたち
そこらまで散歩が真夜中帰って来
男だけが知る真夜中の水である
真夜中のシグナル制服とする対話
真夜中に熱の子抱いた人と会う
真夜中を遠く消えてく消防車
生酔本性たがわずと云う真夜中も候

兼題「大安」

兎島与呂志選

結局は祖母が主張の大安日
大安の鯛は二割も値がはねる
開店の今日大安と知る花輪
大安日ながれ作業の儀式あげ
大安の式場量産する構え
大安かそうかとあざり決めてくる
時間割の通り新婚誕生し
大安の縁起を親ほど気にせず
大安のひかりはしあわせ満載し
大安を○でかこんだお仲り
大安の空港花の香でうまり
結婚は大安でした混みました
その次ぎの大安にする娘の都合
三度目も大安選って式を挙げ
大安はどこかで踏んだ犬の糞
大安に式を挙げると子が折れる
こんな先の大安だのにもう予約
大安の今日は借り着のとなり
離婚には大安なんぞ言うとれず

へそくり大安避けて式を挙げ
大安の初手から石に出つまずき
貸衣裳大安の日のけ番待つ
大安日一人息子へ荷が届き
大安は何日何日と仲人口
大安の鯛はめでたくそり返えり
祝事大安にして気楽なり
大安をウーマンリブが選んで来

兼題「限界」

菊沢小松園選

限界と知ってかそれから現われず
白バイの指限界を待つポタン
おしきせの限界までは妻の酌
限界を越える気若い血のたぎり
ぎりぎりの線でモデルは肉をつけ
風船の限界とうとう子を泣かせ
限界に消費の王様踊らない
限界と言わず勇退ほのめかし
限界と知りつつ不倫兆す月
限界をとうに越えてる目がすわり
限界を越えた花見の二日酔い
寛容の限界までは眼をつむり
限界が来たかあちこち痛み出し
限界の手前でとめる年のこう
限界がわからぬ幼児の目がきれい
限界と気付いた時は運すぎた
トップ会谈又限界が伸び縮み
限界を越えた親切疑われ
ここまでが限界肩の手を払い
気が付いた時は限界越えていた
限界の後姿はかくされず

限界を知らず教育ママハツパ
限界を左遷の椅子でかみしめる
限界を越えて貸し出した焦げつかせ
人妻の限界越えた掌のぬくみ
限界を知らぬ若さにある野心
限界を知っているから美しい
限界を知って銀行のドアを押す
限界を知って一線退くと決め
限界を守ると女燃えてくる
生け花の限界その上曲げられる
限界へ悪友だけが来て助け
仮面にも限界があり涙落つ

兼題「赤」

菊田いさむ選

キャンパスに夕陽の赤をこねている
赤い夕陽を語る引揚者の瞳
赤い陽を背にいそいそと縄のれん
シャバの風遮るム所の赤レンガ
赤まむしの看板眼を引く五十坂
挨拶が済んだら切れた赤電話
シベリアの雪は白いのに赤い国
絨氈の赤は庶民の血の色か
お見合いで断わられたのも赤い爪
赤トンボ見つけた指が輪をえがく
冷やかしたつもりが自分で赤くなり
マニキュアの赤が女を誇張する
満州の夕焼け時折り子に話し
先生が話しかけてる赤い文字
ほんとうは赤字と知ってる女秘書
赤い屋根目当てに探する住宅地
ささやかをおしに老父の赤べレー

美代 花梢
一三三 双葉
柳宏子 六竜子
静馬 美代
扇水 夢成
おんたく 好郎
多どんたく 瓢太
誓二 天笑
一三夫 一治
多多久志 一さむ
凡吉 小松園

赤札が季節の終りを告げてゆれ
再建もくずれ赤旗もよ上り
ルージュー赤に夜のママ出来ごと
赤ライト付けて真昼の救急車
明晰な頭脳が赤へ赤へやり
赤チンで済んで良かった傷を撫で
豪華料理やっぱり赤だしめくり
夕焼けの赤が薄れる田園詩
白い杖赤信号を知っていた
赤い夕陽鍵子だけが残っていた
選歴を動機に赤いシャツ着慣れ
峠茶屋赤い夕日に明日があり

兼題「ノック」

若本多久志選

母さんのノックに心の灯がともる
ノックとはいりやよかった目の場
ついノック忘れて裸見てしま
ノックすれば鼻先かすもドアが開き
貧乏神ノックもなしに又出かけ
人違いとも知らずノックへ胸躍る
ノック掻き消されてはやめにする
忍び泣く声でノックはやめに笑
あれ以来ノックもしない女秘書
春がノックしてるよ雷がふくらんだ
コンコンと叩けば声も「はいっ
ノックもそうでトイレの落ちつかず
胎動は嬉しいノック若い妻
子供屋子どもにノックささされる
ノックなしで入る身分の回り椅子
深夜のノック 冷戦の音で鳴り
ノックする音に気持が出る負目

花梢 新之助
圭井堂 好郎
緑水 柳宏子
葛城 鶴声
一舟 圭井堂
あいき 緑水
葵水 生々庵
小松園 生々庵
圭井堂 一三夫
一三夫 柳志
柳志 真紗子
章雅 子
三十四 新之助
虎声 声

「明治日本の思い出」

定価 九八〇円

右は日本スキーマの父として仰がれているテ
オドルフォンレルヒの手記を五力年余の歳
月を費し、医学博士・中野理氏が原著から忠
実に且つ絶妙な日本語に翻訳されたもの。

「現代南画の描き方」

定価 二千元

川柳社社創刊号から毎月表紙に麗筆を賜つ
ております、直原玉青画伯このたび標記の著
書を発行されました。これは先年ご発刊にな
り大好評を博された「新しい南画と俳画の描
き方」の姉妹版であります。(生々庵)

山荘に風がノックをして通り
妥協するノック静かに待っている
ノックする扉は開かず目のぞく
春風の甘さに胸をノックされ
間違いのない靴音がノックする
子らはもうノックをさる部屋をもち
ノックせず女ごころへはいり込み
ノックへの目配せとささの姿勢とる
期待するノックも無うて一人寝る
朗報は雨戸をこわす程叩たき
真実のノックへ女を意識する
ノックのきかぬ日本間二人落ち
応答を折ってノックする船底
辞表出す決意静かにノックする
もうノックいらぬ父母の部屋となり
わしじやわしじやと小声でノック

迷朗 一舟
多多久志 多多久志



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

堺・若芽・川柳わかやま

富柳会合同吟行句会

八木摩太郎報

人の善さにしむ無口な お人柄 千鶴子

逢う時に見せる涙をためて 母 圭井堂

お人好し笑う妻もお人好し 雀踊子

黒潮に乗って鯨が顔を出し 狂二

上げた顔お尻に出合う汗干狩 弥栄子

汐の香へ二人の下駄の歩がゆるみ 遊子

水槽のハマチは汐の色を忘れ 鬼志

観光船マイクで汐の色を見せ 柳志

一泊も断る友のむつまじさ 儀一

一泊でもう妻の顔する熱海 一二三

細々と一泊のびた申し訳け 照代

一泊の旅行もせずに妻と老い 勇次

一泊の詩情が歩く春の砂 美代

一泊の許可待ちわびる回復期 真紗子

一泊へくらしの中が出来るしまい 宏子

一泊へ小瓶に入れる化粧水 茂美

帰省の子その一泊はしゃべりずめ 次章

一泊の夢を育てて市場籠 千万子

和歌の浦この目で見ても日本一 久司

ガイドうたう浦も時世の油浮く 一光

御三家の外濠の水なごみかけ 維久子

絶景を宿屋がかこむ和歌の浦 ふみよ

春の海ですねえ石を一つ投げ 勉

和歌浦を窓一パイに見え安堵 笑痴

灯台が見えて汐の香濃ゆくなり 葵水

唄われた女給のエプロン懐かしい マス蔵

エプロンにまでエプロンは借り出さ 智

エプロンでのおお口元もう娘 柚息

エプロンがななに当るコマーシャル 吉彦

凡妻のエプロン風呂敷代りもし 十郎

エプロンで皆んなの焼芋買うて来る まさお

エプロンのまつ看病の夜が明ける 城南

エプロンのはばかりのことのいあくび 花梢

エプロンでつつきのドラマへ馳り 金三

エプロンも脂の色で焼くぎょうざ 柳太

独り旅出来ぬ阿呆に子を育て 誓二

阿呆でよし悪い好とは言われまじ 吉太郎

踊れない阿呆で見物代が要り 弘生

阿呆もした頃はやっぱり花だった 城石

理窟に合うてるナと阿呆役見直 摩太郎

まじり気のみ目で阿呆に見つめられ 天笑

阿呆になり切るに世間の眼をおそれ 小松園

むらくも観桜会 藤井 明朗報

大変な嘘が口先きからころげ 緑之助

多数決庶民不在の与党にて 通兎

図書館で孤独忘れた一人もの湖 亮

京の雨明治の音を聞く名所 弘朗

他人さまの暮しは皆案にみえ 清夢

今ほしい金を明日なら貸すという 正朗

過疎にいて人の情に囲まれる 秀子

図書館常連浪人しています 鶴丸

図書館で文学少女何を読む 祥月

大学へ明日は旅立つ子と対話 瑞枝

独身が花活けかえてただ静か 正治

人情のよろさに負けて貸しが出来 文子

人情に負けず信用くずさぬ気 竹雪

他人の子にらんで家の子を叱り 綾美

家裁出て他人となった道を行く 明朗

他人からとかく言われる金を持ち 三雷波

諦めに似た独身の市場籠 柴吻

名所とは知らず桜は咲ききそい 美栄

名所でも自殺の名所とは悲し 独仙

口先きでまるめた頃の亡夫想う 青湖

口先きも頭も切れる平のまま 白汀

図書館は味方若さに立ち向う 竹馬

待合の壁は名所の花ざかり 英子

名所をば素通り恋は湯につかり 軒太楼

父ちゃんが明日へハッパをかける酒 福子

屋台店明日も稼げる星仰ぐ 舞吉

真剣に折って明日を引き寄せる 苑花

子には子の世界瞳に明日の詩 泉甫

背のびして明日へ馳ける人生だ 可動

残業の明日へ廻せぬ親ゆずり 孝華

人情に触れて心も花開く 武男

人情へまた片肌を脱がされる 晃男

人情を夜汽車の窓にかみしめる 勇

明日ひらく鍵なり子等の寝顔見る 孤呂二

耐え抜いて若芽は春の土を破り 滋雀

南大阪川柳会 金井 文秋報



(界・若芽・わかやま・富柳会合同吟行句会・カメラ天笑氏)

子の眼から母さん一番美しい
美しくなる間を夫待たされる
活字にも似た人生の味気なさ
丹精にも答える花の美しい
悪筆は活字にされて有難し
不手際をわびる活字の小さいこと
美しい ポーズ妻には向かぬ人
御予定が ついて多忙な宮内庁
求人難 活字が ついた嘘でない
邪念ない 童話に無理のない 活字
どれどれと 活字追つてる 虫めがね

肖二 柳志 好一 柳宏子 文秋 好郎 葵水 金三 凡九郎 小松園 誓二

冒険を若さ 気張らず やつてのけ
ほのぼのと活字も 匂っている 美談
おどろきは 国家 予算のゼロの数
借りられぬ場合の 予定もたてて待ち
本尊に見えとれて 拝むのを 忘れ
戦争かと思ふ 活字の 野球記事
きまつてるのに 予定と書いておく
予定には 八ハプニングが 座をわかせ
予定だけたてて かなわぬ プロポーズ
手引きされ 活字になった 日の 励み
予定では 赤字が 埋まる 苦なのに
倒産の 活字が 目立つ 下り坂
明暗を 並べ 活字の 無表情
高い 金出して 素肌の 美を かくす
善行が 活字に なって 胸にしみ
おどろきと 淋しさ 緑のない 故郷
弱点を 活字に するぞと たたかれる
予定表 キッチリ 書いて 読み 忘れ
ミニの 美よ 齢 七十に なつても

水京 酔々 新女 綾之助 圭井堂 一舟 古方 鶴翠 春洋 喜風 鶴声 形水 あいき 一治 一二三 静馬 一郎 八郎

母として 一途 再婚へ 耳 かさず 岳太
名もなきも 歴史の 跡の 石段 かつ 一銭
再婚の 荷は 子供等の 祝品 桂馬
観光の 音で 石段 駆ける 靴 吐来
何でもない 一人 石段で 手をつなぎ 吸江
望まれたもの 再婚という 引け目 一歩
再婚も せずお 彼岸に 花を生け 国夫
再婚に かかわりなしと 決めた 過去 武吉
離婚した 印で 再婚の 届け 出し 笑治
石段は 踏まれながらも 明日に 生き 笑児
心では すまぬと 詫びて 二度の 妻 松浦

どんぐり川柳会(羽曳野市)川村好郎報

再婚の話も あつて 若が えり
再婚の ダイヤ 初婚より ひかり
苔むしし 石段 何を 語らんか
子供等が 可愛い そうでと 又 娶り

菜の花句会

自画像を 天使の 幻に 重ねよう
はずしたら 入らぬ 袂 釘で とめ
謎解いて 女は くるり 背を 向け
黙呑権 パントマイムに 似た ドラマ
春めくも 幻ひとつ あるでなし
8ミリの 我が家の スター 無言劇
軒なみに スフの 毛布を つかまされ
幻にある ふるさとを 雪が 降り
学校を 過疎に している は やり 風邪
御指名へ パントマイムで 酔う た ぶり
千年の 謎へ 近づ く 土器が 出る
8ミリを 写す 襖は 開けられ ず
まぼろしを 追うても 女小賢しく
騙される つもりで 謎に のつて 見る
幻を抱き 狂女 の 愛の 唄
嬉しい日と して 袂を はずす 広さです
飛鳥の 謎と ときめ 猿石 野を 見てる
幻や 菜の花 道の 夕まぐれ
謎かけて おいて ぼんぼん 湯につかり
幻に わが 誕生の 灯が 見える
幻の 馬車 青春 を 乗せて 去る

ウイロー社(ハワイ)

妻の 知恵夫の 浮気へ 鍵を かけ
一切が 娘の 鍵になる 母の 知恵
小便の 鍵 東大 勲位に かけ
息子まだ 金庫の 鍵は まかされ ず

中谷 酔々 好童 好郎 好虎 好龍 好虎 好龍 好虎 好龍

力 凡吉 誓二 一栄 美代 鶴翠 静馬 鬼遊 律文 形水 連夢 千歩 一治 鶴声 凡九郎 万の 菜 小松園 薫風 醉々 泉女 雪舟 蒼蛇 樓

獄窓へ冷たく鍵の音の泌み 浮草
 往きかけて 裏木戸の鍵たしかめる 三石
 遠耳も雑音に悩む エアポット あき坊
 雑音をよそに お化粧 出来 上り 魔法麗
 雑音の中に生きつぐ 深呼吸 峯円
 雑音を遠くはなれて お茶を立て 万里歩
 雑音のいたずら話が 逆になり 北海
 忘れぬ声雑音の中に聞き 快寿舟
 都会の子雑音の中にたくましく 河舟
 雑音も苦にせぬ母は耳遠く 拜山
 叩かれて雑音が止む 古ラジオ 山

南海電鉄川柳会 (大阪府) 辻 圭水報
 コンピューターも希望も捨てさる 柳 信
 靈感も信じ 電算機も信じ 天 笑
 コンピューターも神の告げも信じ 圭 水
 短大出キーパーンチャーに慣れる 金 三
 コンピューターの声でお嫁にゆくら 摩 天 郎
 コンピューター儲け話はしてくれず 貴 山
 コンピューターが出した答でまた会議 一 三
 コンピューターがせむ社運は下り坂 宏 三

堺・若芽合同句会 (堺市) 和海藻春報
 春うらら水中翼 船島を縫い 摩 天 郎
 幸祈り海上無事と移民船 双 楽
 軍手とは農協らしい土産物 徳 子
 農協のおぼりさんと云う団体 敬 三
 農協の理事に先祖の名で呼ばれ 一 舟
 農協も聞き耳立てるカドミウム 誓 二
 春風と来た農協の赤いバスマ 夢 成
 農協も忘れず春を P R 今 雨
 つくつくし筆によく似た顔を出し 文 成
 春来れば公害うらむ柳の芽 藤 持

伸びた芽教育ママが摘みたらがり 清 涼
 少年Aこれが悪の芽はびこらせ 柳 信
 ごみ箱と知らずにネギは芽をのぼし 千 万 子
 ボタ山の初芽は朗報記事になり 金 三
 ねころんで書いたとみえぬ表書き 宏 子
 寿の筆はたつぷり墨を吸い 弘 美
 大臣を辞めたら揮毫言うて来ず 静 馬
 筆取れば天下下一品染業中 小 松 園
 母さんの代り下になって 見染められ 小 松 園
 代表は慣れた口調の秘書課長 城 南
 ぼろそに代理云われている 示談 草 春
 葬式は代理で済ませゴルフ場 青 香
 宴会の社長代理は酌きまわり 耕 人
 御命日坊さん代理で御経あげ 双 楽

富柳会句会 (富田林市) 阿部 柳太報
 相手方煙にまいて席を立ち 双 楽
 落葉焚く煙に過去を忘れ去り 雑 久 子
 云訳けをせずに煙にまいておい 紅 吉
 ズベ公にも少女瞳が美しくい 凡 月
 兄いさんに彼女いつまでしておく 静 馬
 同姓同名の彼女と違う顔に恥じ 志 寿
 待ち呆け彼女は来ずに使い来る 朝
 彼女も崩れる風情武装解く 弥 栄 子
 反対をされて彼女の方が炎え 美 代
 倒産へ彼女の真意つかみかけ 宏 子
 出発へお名残り惜しい手がからみ 百 水
 出発の背広へ母は背伸びする 豊 子
 すぐに泣く妾此処で送ります 笑 痴
 居候遠慮しながら名刺張り 吉 太 郎
 表札の養子の名前に馴染んでき 一 栄
 表札の名刺マダムの城守る 花 梢

二号邸寓と小さな女文字 摩 天 郎
 別居中ながら表札元のまま 小 松 園
 駒つなき句会 南 柳 報
 問題を買って息子の芽を枯らす 柳 信
 芽を出した高い玉ねぎやり場なし 柳 信
 寒かろうあおい木の芽に雪ぼうし 大 作
 スモッグに負けず舗道に新芽あり 師 津 大
 風来れば風にゆられて柳の芽 河 太 郎
 踏まれても踏まれて出るつくしんぼ 南 柳
 山火事に新芽あわれな音で焼け 育 園
 恋を得て柳の新芽美し 宏 子
 芽が出たかたがパチンコ玉のこと 悟 郎
 仕事より盆栽の芽が気にかかり 小 松 園
 出揃った芽をブルドーザ用捨なし い わ を
 鳥居画いた塀の下の芽よく育ち 垂 井 葵 水 報
 川柳わかやま 垂 井 葵 水 報
 黒ネコのタンゴが好き 一 年 生 十 郎
 背を屈けてマツチ土工の風に馴れ 十 郎
 色黒の顔にも喪服よく似合う 久 司
 黒いねと云われ鏡の苦笑い 久 司
 目の黒い間忘れぬ酒の味 福 松
 碁仇に今夜も黒を持たされる 佳 宵
 黒砂糖明治が生きる母の味 醉 々
 まっ黒に焼いて水着の下白 大 黄
 シルエットでもよいよ逢いたい宵 延 伊 知
 誘惑をしりぞけ黒色系が好き 夫 夫
 髪を舞うた老妓の髪 一 郎
 黒山の言うまま黒をうつ私 一 郎
 着ホクロを罹災のあとも信じおり 弘 生
 はち切れる若さが黒を派手に着る 美 智 世

初対局まアマアと先ず黒を持ち
風つよし木の葉のように舞う鳥
風吹けばよるけたくなる好奇心
夜半の風明日の桜気にかかり
そよ風に髪のはつれが夢二調
候補者はエプロン票に目が光り

良四郎
みさを
一治
たかし
裕竜
美



○前列左から明朗・輝之助・本社の一三夫(明子ちやん)祥月・後列左から晃明・代仕男・鶴丸・孤呂二・通児諸氏(町紅氏連彦)

★同人20余名を擁する島根の柳人諸氏。カメラ明朗氏。

エプロンを掛けた姿が母に似る
エプロンの折り目キレイなお人柄
エプロンの下から焼芋が匂い
涼風を送って新人に期待する
風さやか越後へ妻と久方振り
ひねくれているか皮肉とすぐ感じ
お花見の誘いが風邪の床へ来る
エプロンに閉じこもってた一円貨

単人
嶋
四四方
太茂津
守夫
千寿子
葵水

川柳たけはら

森井 菁居報

世の移りバイクで巡る遍路笠
うどんでも出せばよかった不意の客
怒り狂う掌中で小石ちぢこまり
バス楽し富士を右に見左に見
かきたてる旅情へ金とひまがない
山茶花の地に落ちてから愛を知り
北風よビッコの背なを押ししてくれ
善人の目に警察が頼りない
死んでもよいなど不思議な恋でも
お茶の香に今日の疲れもほっとこれ
自らを労わる初老のひとりごと
棟上げの空へ吸い込む槌の音
赤ちゃんが動くときと当ててくれ
腹帯を巻いて母性愛とか意識
たずめば野原に冬は冬の詩
ダウンした私へ温かい家庭
信仰に生かされわが家まるうなり
追求へ答はノーとしか言えず
友すでに名をなしており四十五
働いて働いて来た母の手よ
梅の芽のふくらみ春を香ぐわせて

扇水
西合
不動
五湖
のり子
鬼焼
郷愁
英詩
壽美香
大陸
清太郎
静雨
三枝子
菁居
雅鳳
淨美
政己
凡女
日出夫
令江

母ちゃんに苦労かけてる指の節
つくしん坊の頭みつけた墓掃除
特有の匂いへ医者静かなり
手鏡へオハヨウ病室の朝静か
文士づらして出来た反古の山
時計ばかり見て病院の夜が長い
許される嘘あり母を慰める
思い出の野仏すこやかにおわす
運命と諦め誤診恨むまじ
大物になりそう新生児のあくび
鶴の一声でうやむやにするつもり
下敷に自負あり夢のページ抱く
教育ママの兆しを夫にひやかされ
原爆許すまじ資料館の怒り
その時の風にまかせろ心きめ
忙しきこと悴せとわかりかけ
柳の芽お地藏さんもねむたそう

洋子
尚子
延子
笑子
美佐雄
貞子
春昇
不朽
一路
操幸
蘭幸
峰泉
和子
静火
房水
静苑
紫苑

城北明朗句会

川口 弘生報

アルバムのほこり金婚式の幸
幸はひい孫までが腰たたく
オイ・アレで用事が足せる妻と居る
幸を叩きつけてる牡丹バケ
産院で幸せそうなパパの顔
幸福の暮しの中に鉢もいる
孫に手を引かれ笑顔一ぱい
幸せの顔いっぱいハネムーン
幸運が続いてなにか不安なり
幸を夫婦喧嘩でぶっこわし
七草も二草足りぬ粥となり
従来の仕来たりやっぱり屠蘇の朝
春雨にぬれた眼鏡は拭かず読み

三十四
弘生
弘生
隼人
隼人
志津
濁水
繁子
満津子
秀村
シゲ
富士
春果

暑中広告受付

本誌五分の一段が千円です
グループをおもちの方もご
利用ください。
★原稿締切・六月末日
あなたもゼヒ一口

この寸法が二百円
川柳塔社
振替口座大阪
三三三六八番

- ★阿万万的・松川杜的共著「的」四五〇円(送料共)
- ★西尾 葉著「水 鶏 笛」六五〇円
- ★後藤 梅志著「秀句鑑賞と梅志句集」六〇〇円
- ★若本多久志著「親ごころ・子心」二八〇円
- 「老いの坂」五六〇円

八月号発表表 (6月15日締切)

- 川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
- 近作柳樽 (10句) 川村 好郎 選
- 課題吟 (各題5句以内)
- 「電話」 藤岡 花 梢 選
- 「モーター」 清水 一 保 選
- 「アルバイト」 新岡 回天子 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

九月号発表表 (7月15日締切)

- 川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
- 近作柳樽 (10句) 川村 好郎 選
- 課題吟 (各題5句以内)
- 「手相」 吉田 圭井堂 選
- 「なつメロ」 麻生 アート 選
- 「茶柱」 佐野 卜 占 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かたじけなくしてください。

本社六月句会

日時	六月七日(月)	午後六時
会場	以和貴荘(いわきそ)	
兼題	柳 話	
席題	「マイカー」 「小 銭」 「実 家」 「転 職」	
会費	三題 (題と選者は当日発表) 各題三句・厳守	
	二百円	
兼題	若本 多久 志 垂井 葵 水 選 橘高 薰 風 選 傍島 静 馬 選 正本 水 客 選	

★投句だけの方は切手50円封入

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

8月の兼題 「ノ教」「急ト」「釘壁」

8月は白柳句集刊行句会

定価 百八十円(送料六円)
半年分 千五百円(送料共)
一年分 二千六百円(送料負担)

昭和四十六年五月二十五日印刷
昭和四十六年六月一日発行

大阪市内南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼 発行人 中島 蓬 太 郎
印刷所 大陽印刷株式会社
郵便番号 五四二

発行所 川柳塔社
電話 大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

ペンペン草

★路郎忌川柳大会がいよいよ来月に迫った。多久志大会委員長以下満を持してゐる。

★清水白柳遺文集が、栗、小松園、摩天郎三氏共同編集で路郎忌にオーブンの予定。

★四月から小包料が値上げになった。「水鶏笛」の七十円が百十円になり、七月一日から第三種郵便物が二倍になる。これは決定的で今さらどうワメいてもしよ

疲労・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠 ☆食後にどうぞ ☆詳しくは医師や薬局・薬店でご相談ください。



58

葉子

▼スケートレックスン場で教師が手をとって教えているのは10代のお嬢さんでした。私たちは老人あつかいで転るぼうがどうしようがはったからかです。でも川柳界では30代は若いほうなんですわね。スキーには心得がありませんが、川柳はあぶない腰つきです。

うがないが、毎月二、三冊は行え不明になる、このよ
うな送本で難だけはなんと
か解消してほしいものだ。
★郵便の話のついでに、ち
よつと旧聞になるが、四月
二十日の郵政記念日にある
放送局へ「切手大臣」を書い
た。例の「選挙切手」や「大
臣就任記念切手」に対し、
こみあげる怒りを漫才ふう
に書いたものである。
★この原稿のなかに、窓口
の不親切や、女の口に美人
のすくないのを書いたた
め、布施のある郵便局の女
の四名から、ドえらい抗
議文がきた。

★郵政記念日の朝の放送だ
ったので、さぞ自分たちを

天使のようにほめてくれる
ものと期待していたところ
「美人がいらない」というこ
とが、よっぽど頭にきたら
しく、こんどのミス神戸は
郵便局員だというのだ。
★ミス神戸といえは、大洋
の別当薫監督の奥さんもそ
うであるし、入試問題に関
係したのも元ミス神戸だ。
漫才の捨丸・春代の春代さ
んも元ミス神戸だったと聞
いている。
★ほくらの原稿の一節をこひ
ろうしよう。
Aー郵便局はデパートとち
がってサービスのわる
いとこや。
Bーそうかな？
Aーそれに女の口に美人が
おらん。

三の局名だけで
も、郵便物が届
く。
一そのほかいろ
いろお世話にな
っているので、
郵便局に感謝を
しても愚口を云
うはずがない。
しかし「大臣切
手」ではトンダ
敵役を買ったも
のである。
★戦後のある期
間、標語の賞金
だけで生活をし
たことがあった。
★「書留でっせ」と、生活
費をはこんでくれる配達さ
んがあった。ヤミで買った
タバコをあげるのとよこん
でくれた。この配達さん、定
年まで勤めたが、自転車に
も乗れないのか、いつもテ
クテク亀のように歩いてき
た。ほくにしてみれば、こ
の「書留でっせ」という声が
神の声にも聞えたものだ。
★地を一つ。生野、東成、住
吉などの局名だけでも郵便
物が届くので、大敗市だけ
を試みてみた。ザマミロノ
ついに届かなかった。路郎

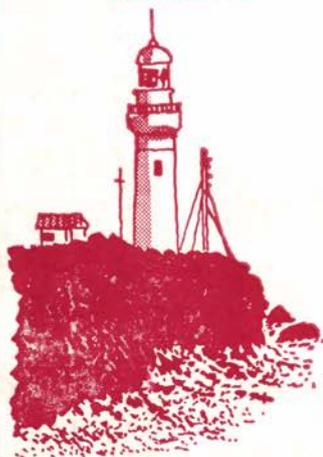
色紙短冊
書画用品

丹書堂

大坂戎屋しん
せむせむしん

先生は、戦前、東京何々で
ハガキが着いたそうで、こ
れは知名度の差であろう。
★三歳の恋人がやっとカナ
が読めるようになった。日
に一本はハガキを書いて送
る。返事はハガキものぐる
が、まだ文章にはなってい
ないが七円のたのしみにし
ては安い。
★雑誌の印刷費が二割ほど
上がった。送本費が二倍に
なる。同人雑誌も苦しくな
った。
★暑中広告、またよろしく
お願いします。
(不二田二三夫)

黒潮躍る 紀州路へ



〈白浜ゆき〉 なんば発時刻
急行 きのくに6号…(毎日)…12時50分発
急行 きのくに11号…(毎日)…16時40分発
急行 きのくに7号…(土曜)…13時21分発
〈白浜・新宮ゆき〉 なんば発時刻
急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発
夜行直通列車…(毎日)…22時15分発
●きのくに6号ときのくに7号は座席指定席券を 他の列車は座席整理券を発売

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (311) 5038

南海電鉄

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー